

総説：イギリス対象関係論

－その歴史的展望と臨床的意義－

祖父江 典 人

I なぜ対象関係論なのか

1) はじめに

筆者が精神医療の現場の中で心理療法の実践に携わりだした20年余り前、臨床心理士と言われる職種は今ほど社会的に認知されておらず、また現場で活躍する先輩も数少ないのが実情であった。そして、精神医療の中では、精神病や重症人格障害と言われるような、いわゆる病態の重い患者が数多く存在し、その彼らに対し、臨床心理士としてどのような心理療法や心理臨床実践が可能なのかが、私たち臨床家に問われ、私たちの存在意義として鋭く突きつけられていた。

なぜなら、精神病院の重症例対象（また必ずしも重症例でなくても）に心理療法などというものが本当に有効なのかという疑念が、公然と口にされることこそ少ないものの、精神医療の現場の中では医療スタッフの間で漫然と広がっていた。

また、私たち現場の臨床心理士当事者の間でも、心理療法の有効性に対する無力感が、ある意味存在していた。なぜなら、特に精神病院における重症例に相對すると、臨床心理学の世界で私たちが教育されてきた、共感や受容を中心にする技法では歯が立たないという体験を積み重ねることも少なくなかったからである。私たちは常識的コミュニケーションの通用しない、特異な精神病世界に棲む患者を前に、言葉を失って立ち竦むことも珍しくはなかった。

精神科医のような投薬という具体的手段のない私たち臨床心理士にとって、精神病や人格障害の患者たちは、到達することのできない高い壁のように目の前に立ちはだかった。私たちは彼らとの心理的な関わりをどう模索していったらよいのか、暗闇に迷い込んだような無力感、自責感、もって行き場のない憤

りなど、さまざまな陰性感情を体験する淵に立たされていた。

このようなときに私が出会ったのが、対象関係論という、当時イギリスから紹介されつつあった新しい精神分析の流れであった。対象関係論の中でもクライン派という学派は、統合失調症のような精神病患者から境界例と言われるような人格障害など、いわゆる重症の患者群に対する精神分析や精神分析的な心理療法の理論や実践に実績を挙げていた。そして、その特徴は、当時の私たち臨床家の無力感や陰性感情自体を、意味あるものとして理論に組み込む画期的な内容であった。

重症患者に対面したときに私たちが味わった無力感、自責感、憤りは、クライン派の中では、患者自身の荒廃した内的世界を治療者に伝えるための、非言語的コミュニケーション手段としての投影同一化概念として理論化されていた。すなわち、患者は陰性感情を治療者に代理体験させるというやり方で、自らの無力さや絶望を無意識的に伝えてきていたのである。

この理論展開は、重症患者との手がかりを失っていた心理臨床家にどれほど救いの手をさしのべたか計り知れない、と筆者は考える。なぜなら、私たち臨床家は、患者の拒絶や関わりの乏しさや激しい行動化などの陰性態度の背後に、彼らが負の関係性を通して伝えてきている無意識的なメッセージを読みとる視点を手に入れることができたからである。

投影同一化を通してのコミュニケーション。対象関係論が重症患者に接近できる可能性を切り拓いた理論・実践両面に亘る、ひとつの大きな到達点である。

こうして臨床家は、患者との間で体験する無力感、憤り等の逆転移感情を、あるまじき感情として徒に否定する必要はなくなった。むしろ治療者自身の中に沸くそれらの陰性感情を積極的な手がかりとして、患者の内的世界を推測し、関わりをつけるための治療的道具として使う道が拓けたのである。

筆者が心理臨床の実践に20数年前に乗り出し、精神科臨床の厚い壁を前に立ち竦んでいたときに、対象関係論はこうして筆者に手を差し伸べてくれた。対象関係論の特色や長所は他にもさまざまあるが、筆者が臨床的に一番有用に感じたのは、この「投影同一化を通してのコミュニケーション」、つまり「逆転移の活用」、という側面である。筆者が対象関係論の門を叩き、以後深く入り込ん

でいった原点は、ここにある（祖父江、1994）。

さて、拙稿では、上記のように筆者が理論的にも実践的にも深く依拠してきたイギリス対象関係論をもう一度原点に戻って再検討、再評価することに、その目的を置く。それには、Freud,S.にまで遡って対象関係論の源流を追い、今日までの歴史的流れを展望することや、さらには近年の対象関係論の動向や今日的意義を探る必要がある。この試みを通して、対象関係論の心理臨床における臨床的意義や、今後の新たな可能性にまで視野が及べば幸いである。

2) 心に理論は必要なのか

対象関係論は、現代クライン派に見られるように、近年ますます理論を精緻化させている。しかも、その理論化の方向性は逆転移や投影同一化などの無意識的な心的コミュニケーションを中心概念に汲み入れた、内的世界の描写にひとつの力点がある。それゆえ、心理臨床の他学派から、対象関係論はとかく主観に偏った理論に走りすぎている、という批判が加えられることもそれほど珍しいことではない。

だが、そもそも私たちは、人の心に対する何らかの想念を——どの程度それを意識しているか否かは別にして——いつのまにか抱きながら、人と関わっているのではないか？ 特別心理臨床や精神保健の専門家でなくても、人は皆、人間関係、親子関係、夫婦関係に関してなど、おのおのが一家言を持っている。また、それほど明確ではなくても、私たちは他者に対する漠然とした認知や感じ方をもとに、関係性の中に参入している。

それらの想念や感じ方は、各人の生い立ちや性格等に彩られたきわめて個人色の濃いものではあるにしろ、人それぞれの対人関係を、背後で支え持つ思念的基盤をおぼろげながらも形成している。その意味で、それらの想念は、対人関係における「理論」の租形となるものだと言っても差し支えないのではないか。各人はそれらの「理論」を知らず知らずのうちに後ろ盾にして、自己や他者を知覚、認識し、他者と関わる。

クライン派のIsaacs,S. (1948) の謂いに習えば、合理的で高度な「現実的思考」も、元をたどれば「空想的思考」(想念)からの発展形なのである。

このように、人は、他者に対してある想念や観点を抱き、それに基づいて相互交流を持ちながら生きるのが自明な生き物である。すなわち、それが、人間が高い知能を有し、共同生活を営む社会的動物であるゆえんともなっている。

心理臨床における理論も、もともとは Freud,S.,Jung,C.G.,Rogers,C.R. などの創始者自身の「主観的想念」に出自を持つと言っても過言ではない。だが、それらの想念は、創始者自身の臨床実践の営みと検証を経、さらには後継者たちの臨床的追認を通過する中で、広く理論として受け入れられるような普遍性、妥当性にまで洗練されていった。

心理臨床理論も、人間個々人が持つ対人関係に関する感じ方の、ひとつの洗練された発展形に過ぎない。

さらに、心理臨床の諸理論は、単なる洗練された心理学的人間論の域を超え、心病む人たちやクライアントに対して心理的援助の効力を持つ理論であらねばならない。したがって、理論は技法と連動し、思弁ではない実証性を要請される。

ここに心理臨床の心の理論が、哲学や文学とは異なる大きな理由が存する。心理臨床の諸理論は、臨床の中で吟味され、絶えずその妥当性を検証されていくプロセスを経ねばならない。それは、患者やクライアントの心の病気の改善、人格の成長、適応の向上などを指標に判断されるものである。

さて、ここで冒頭に戻って、対象関係論への批判に対し、とりあえずの返答を簡潔に述べておきたい。

これまで述べてきたように、心理臨床のいずれの学派においても、人間関係に関する無意識的想念の発展形である「理論」のパラダイムを、それぞれが備えている。Rogers,C.R. (1942) は、精神分析を知的理解に偏りすぎると批判したが、情緒的共感を重視する Rogers とて、共感が対人関係にポジティブな自己実現効果を及ぼすという「理論」を保持している点で、「知的理解」の枠組みから自由なわけではない。

ただ、対象関係論への批判の焦点は、それが、メタ心理学的な概念をフルに活用し、抽象的で複雑な理論的構築を近年ますます進めている点にあるのだろう。

なぜ複雑で高度な理論が要請されるのか？ それに関しては、人間関係においては、「目に見えるものだけがすべてではない」という返答を取りあえず残しておきたい。すなわち、対象関係論は、精神分析ならではの、無意識や無意識的コミュニケーション概念を重用、発展させたがゆえに、理論の複雑化と高度な主観性への道を辿ったのだが、詳しくは項をあらためて論述することになる。

3) 心の理論は科学か否か

心理臨床における理論とは、物質科学とは対照的に、計量によって事実の同定がもたらされる種類のものではない。多かれ少なかれ、主観的な認識を理解の根拠にしている。

ここに心理臨床理論の科学性に、常に疑念が投げかけられる要因があり、対象関係論もその例外ではない。

だが、河合（1986）や鑑・名島（1991）が、臨床心理学の科学的基礎として、「経験科学」の提唱を行っているように、理論の妥当性は絶えず患者やクライアントとの関わりの中で吟味される。物質科学のように、科学的実在を正当性の根拠に置くものではないが、患者との経験的な事実の蓄積によって、その普遍性と妥当性は十分に確かめられうるものである。

とりわけ対象関係論は、心理臨床の中でも、患者や治療者の主観的体験（心的現実）を重視するので、治療過程での検証を経た「経験科学」としての科学的根拠は、強調されてよい。

もっとも、Heisenberg, W. (1956) という物理学者は、「自然科学はもはや観察者として自然に立ち向かうのではなく、人間と自然の相互作用の一部であることを認める。分離、説明そして整理という科学的方法は、方法が対象をつかむことによって対象を変化させ、変形するという、それゆえ方法はもはや対象から離れえないということによって課されるその限界を知るに至る」と論及している。すなわち、自然科学は、今ではもう、一人の客観的観察者として、自然に相対しているのではない、とのことだ。観察者と観察物の間には、相互作用が存在し、相互に影響がもたらされるという、きわめて間主観的な科学論

に自然科学も変化してきているらしいことを補足しておきたい。言うまでもなく、これは、臨床心理学の科学的基盤にも相通じるような認識の転換である。

4) 心理臨床の諸理論の中での対象関係論の位置づけ

心理臨床の諸理論といっても、あまたの学派がある。ロジャース派、精神分析学派、ユング派などの従来からの学派のみならず、最近では認知療法や多様な折衷的心理療法の出現など、その枝分かれや細分化が進んでいるように見受けられる。その中で対象関係論の位置づけを明確にするのは必ずしも容易ではないが、まずは、大まかな輪郭を提示することから論を進めたい。

対象関係論は精神分析の一学派である。したがって、Freud,S.からの精神分析理論の多くに影響を受け、継承もしている。

成田（2004）はFreud,S.の主要概念として次の6つを挙げている。「無意識」「抵抗」「転移」「幼児期体験の重視」「性欲論」「精神一性発達論」。この項目から一見してわかるのは、精神分析が「無意識」「性欲論」「幼児期体験の重視」を中心に据えた心を理解するための諸仮説（局所論、構造論、欲動論、神経症の成因論等）を持ち、それが「転移」や「抵抗」という治療技法と連結し、さらには「精神一性発達論」のような心の発達論まで兼ね備えている、ということである。すなわち、精神分析は、臨床の中から経験科学としての知を集積し、それが技法的な発展に貢献し、さらにその発展が臨床の知を深めていくという、臨床と理論との有機的で緊密な相互連関のもと、体系化されてきた。

今日の対象関係論も、精神分析のこの大枠に添って発展を遂げている、と言える。すなわち、病的な心のみならず、健康な心を分析、理解するための心の諸理論を持ち、それが技法と連結し、さらには心の健康な成長の道筋である発達論的観点をも内包させている。もっとも対象関係論は、この3つの枠組みのそれぞれで、後の項で詳しく述べるように、フロイト理論に大小さまざまな修正や変更を加えているのであるが、大枠としては精神分析ならではのパースペクティブを受け継いでいると言ってよい。

「心の理論」「技法論」「健康・発達論」を有機的に関連させた体系的な心理学を構築しているところに、心理臨床の中での対象関係論のひとつの大きな位置

付けを見出すことができるだろう。

さて、少し各論に入って、さらに対象関係論の特色を明確にしたい。

まず、「心の理論」に關すれば、心理臨床の他学派と一線を画しているところは、「無意識」の臨床理論に表れているだろう。まず、無意識を理論の中心に組み込んでいる学派は、精神分析とユング派しか見当たらない。だが、ユングがもっとも着目するのは人類全般に共有されるような普遍的無意識である。あくまでも個々人の無意識に目を凝らす精神分析とは、その点で大きく袂を分か

つ。対象関係論は、無意識重視の点で、精神分析の正当な流れを汲んでいる。というよりも、フロイト理論の中でも、もっとも無意識の重要性を強調し、理論的あるいは技法的発展を遂げたのが、対象関係論だといっても過言ではない。その意味で、対象関係論は、心理臨床全体を見渡した中でも、もっとも個人の無意識重視の学派と言える。しかも、対象関係論は Freud の時代とは違い、早期母子関係を基軸に据えて、自己と対象との内的対象関係の視座から、個人の無意識を分析しようとする。対象関係とは、「世界と関係する主体のあり方」（北山、2001）なのである。

松木（2002）は、次のように対象関係論を定義している。

「おおまかには、対象関係論は次のように定義できるだろう。外界現実とは区別される精神内界（内的世界）が精神内に三次元的空間を持つ体験の場として想定され、そこでの（複数の）自己と内的対象（群）の性質と相互交流の在り方が、その個人の感じ方、考え方や振る舞いを規定している、との考えである。つまり個人の外界での言動は、内的世界での対象と自己との関係の表出、あるいは外在化といった側面としてとらえることができるとするものである。この対象関係論と混同されやすいものに対人関係論があるが、このモデルは外界での個人の対人関係の有り様そのものにパーソナリティの特徴がそのままあり、内的世界を想定しない点において対象関係論とは一線を画している」。

ここで松木は、対象関係論との比較対照として、内的世界を想定しない対人関係論を持ち出しているが、他の心理臨床の諸学派も、それぞれ外的適応や現実的環境要因の重視などにおいて、対象関係論よりは内的世界の重みを付度し

ていない傾向にある（もっとも、対象関係論の中でもいわゆる独立学派は、環境要因重視の点で Kohut, H. の自己心理学に似るという指摘（衣笠、1992）もあるので、一概には断定できない側面も持つが）。

さて、端的に言って、内的（無意識的）対象関係を想定する利点とは何になるのだろうか？ 内的対象関係を想定することで、説明できないことが説明できるようになるのだろうか？

この点に関しては、すでに Klein, M. (1927) が応えている。

「やさしくて愛情深いその母親とは対照的に、子どもが超自我の懲罰に脅かされているということは、実に異様なことである。すなわち、この事実から、私たちは決して、実在の対象と子どもに取り入れられた対象とを同一視してはならない」。

Klein がここで言っているのは、現実の母親は優しく情愛深くても、子どもがその同じ母親に対して、超自我的な厳しくて怖いイメージを強く抱くこともあるではないか、ということである。すなわち、現在の対象関係論的な言い回しに調整すれば、子どもであっても、すでに彼特有の内的世界を保持しており、そこに棲息する内的対象像が母親に投影されたり、外在化されたりすることもありうる、となる。

この視点は、心理臨床の中だけに留まらず、精神分析内でも技法的な帰結の微妙な相違に辿り着く。つまり、対象関係論の治療論では、現実的な人間関係の修正や環境の調整を目論むだけでは不十分であり、すでに患者の内部に根付いている、内的世界（内的対象関係）そのものを変化させる必要がある、という視座になる。いくら実際の治療者がやさしく受容的な関わりを行ったとしても、本人の内的対象関係自体が修正されなければ、現実の人間関係も本質的には改変されないではないか。そして、その改変をもたらす中心技法となるのが、転移分析、なのである。なぜなら、過去の重要な愛着対象との関係（内的対象関係）は、現在の治療関係の中に再演されてくるからである。それを転移解釈によって、直接手を加えようというのである。

ここで対象関係論は、「内的世界の理解」と「転移分析」を眼目として強調している。

もう一点対象関係論の特色を抽出すれば、それは早期母子関係の重要性に関して臨床を通じて導き出した点にあると言えるだろう。周知のように、Klein, M. は、2,3歳児のプレイ・アナリシスから自らの臨床実践を開始した。その中で彼女が発見したのは、2,3歳児の子どもの心においても、母親との部分対象関係を中心にした、豊饒な内的世界が展開していることであった。この経験から、Klein は、Freud, S. のエディプス・コンプレックスを中心にした、父－母－子どもの三者関係世界ではなくて、母子関係を中心にした二者関係世界へと視点を移動させた。すなわち、Klein は、Freud よりはるかに早期の年代に、発達論的にも病因論的にも着目したのであった。Freud が大人の中に子どもを発見し、Klein が子どもの中に乳児を発見したと言われるゆえんである。

このように母子関係の重要性に関して臨床を通じて主張したのは、対象関係論に端を発すると言えるだろう。この後、対象関係論は、二者関係の病理として精神病や重症パーソナリティ障害などの解明に向かい、重症ケースの治療可能性の拡大にも大いに寄与していった。

また、母子関係の重視は、精神分析内にとどまらない影響力を広く関連分野にも及ぼした。ひとつ例を出せば、対象関係論では、Winnicott, D.W. の功績が大きい。「ひとりの乳児などというものはいない」という有名な箴言に見られるように、彼は精神保健の専門家のみならず、一般家庭の母親、父親にも、書物や講演やマスメディアを通じて、母子精神保健の啓蒙活動を行っていった。今日、子育てにおいて、母親の情緒的関わりや応答の重要性抜きにして語ることができなくなっているのは、Winnicott や Bowlby, J. などの対象関係論者の貢献も大きいところがある。

以上、心理臨床の諸学派の中での対象関係論の位置づけとして、大枠としては体系的な心理学の構築、細部に入れば、「内的世界（内的対象関係）の理解」と「転移分析」、「二者関係性への視点」、「早期母子関係の重視」などを中心に述べてきた。他にも細かく見ればさまざまな異同を抽出できるだろうが、さしあたって、これらのポイントを、今後の論考の前置きとして挙げておきたい。

ただ、最後に付言すると、人間や人間存在に関するものの見方として、対象関係論が問いかける、もっと本質的で重要なポイントとしては、人が内的主観

的世界を生きているという視点の中にあり、それは人間の実存的本質が何かを鋭く追求するような性質を持っている、ということである。すなわち、対象関係論とは、人間の主観的体験世界に価値を置き、その意味を問うものであり、「意味や関係性のない人生は生きるに値しないという観点を提出した」（Gomez,L.1997）。すぐれて実存的に人間の生の意味を問う心理学という横顔を持っている。この点にも看過できない対象関係論の含蓄がある。

さて、次章以下では、対象関係論の具体的中身に踏み込み、その歴史的変遷や近年の動向について、論述を試みていくこととする。

Ⅱ イギリス対象関係論の歴史的展望

1) 対象関係論の源流：Freud,S.

「対象の影が自我の上に落ちる」

この美しくも詩的でさえあるフレーズと共に、対象関係論の幕が切って落とされたというのが、今日ほぼ定説となっている（松木,1996; Malcolm,R.R.1987; Ogden,T.H.1986）。Freud,S.は、「悲哀とメランコリー」（1917）の中で、メランコリー（うつ病）の精神病理を論じる中で、この言い回しを使用した。

Freudは、メランコリーという疾病においては、対象の喪失を契機として、対象に対する愛と憎しみの未解決の激しい葛藤が、対象との取り入れ同一化により「自我の上に落ちる」と説いた。すなわち、その無意識的な激しい葛藤（特に攻撃性）ゆえに、対象を心理的に喪うことができず、その対象を取り入れることで自我の中に再現し、逆に葛藤を遷延化させている状態だと論じた。ここにおいて、取り入れられた対象は、内的対象として自己との間に葛藤的な絆を形成するという、対象関係的視点が導入されており、対象関係論の幕開けを告げるものとして評価されたのである^{注1) 注2)}。

その後Freudは、1923年の論文「自我とエス」の中で、エディプス・コンプレックスの抑圧と超自我（自我理想）形成を関連付けた。そして、「自我理想の背後には個人の最初のもっとも重要な同一視が隠されているからであり、その同一視は個人の原始時代、すなわち幼年時代における父との同一視である」と述べ、さらには「超自我は父の性格を保持する」と展開させている。すなわち、

超自我は、Malcolm,R.R. (1987) の言うように、「内的世界における内的対象」なのである。

Freud は、超自我形成を論じる中で、自我、エス、超自我というように人格全体を健全に構造化していく上でも、対象の取り入れとその同一化が必然であるという、対象関係論的視点をさらに鮮明に打ち出すに至ったのである。

さらに、Freudの対象関係論的観点は、こうした個別の論文の中ばかりでなく、小此木 (1985) の指摘するように、彼の精神分析思想の全体を通じて底流に流れているところがある。すなわち、Freudは、精神分析を生物学的科学基盤に基礎付けようとする医学者の側面と、もう一面では、夢や空想などの心的現実に重要な意義を与える心理学者的側面の両面があった。後者のFreudが描く臨床記述においては、自己と対象から成る内的世界の情景が至るところに描かれている。これもフロイト心理学の対象関係論への親和性の一端を示していると言えるだろう。

別の角度から、Hinshelwood,R.D. (1991) は、Freudが転移の重要性を押し出したことで、精神分析は自我と対象との内的な関係に着目する必然性が出てきたと述べている。つまり、ドラ症例において、陰性転移がいかにかきたものであり、分析家との間で実演enactmentされるものかにFreud自身は気づかなかったが、後世の分析家は、ここから、現実世界とは違ったパーソナルな内的世界が分析家に転移されてくるといふ、対象関係論的治療論の萌芽を学ぶことができる、というのである。

さて、筆者は、対象関係論の起源をFreudの「悲哀とメランコリー」に求めてきたが、近年Ogden,T.H. (2002) がこの論文に新たな光を照射している。彼の論点は、Freudの対象関係論的思考の意義をくっきりと描き出しているので、少しく紹介したい。

まずOgdenは、Freudの同論文における思考の道筋を丁寧に追いながら、次第に対象喪失のテーマに焦点を絞っていく。すなわち、端的に言えば、この論文において述べられているのは、対象喪失を避けるために内的対象関係が形成される構図を描いていると、Ogdenは言う。そして、そこに描かれている内的対象関係とは、自己愛的に対象との絆を維持しようとするものである。すなわ

ち、メランコリー者は、幼少期において自己愛的な対象愛から成熟した対象愛への移行ができなかった人たちであり、それが成長した後、喪失の体験にみまわれたとき、もともとの自己愛的な同一化に退行し、愛する対象は断念されなくなってメランコリーに陥っていると、OgdenはFreud論文から読み取っている。

Ogdenは、従来の解釈では、愛する対象が失われたことへのアンビバレンツ、特に憎しみへの同一化の局面からFreudのメランコリー理論は構築されたとみなされているが、Ogdenはこれは読み間違いだという。彼が言うには、Freudのこの論文の中心ポイントは、メランコリー者が、普通の悲哀を体験する人とは違って、対象関係の自己愛的な形態に捉われてしまっていることにある、と。

Ogdenによって、「悲哀とメランコリー」は、対象喪失の局面での「怒り」から、喪失に伴う「痛み」やそれを防衛するための「自己愛的対象関係」に、明瞭に主題が移された。

この視点の移動は、おそらくFreud論文に含まれていた対象関係的思考の今日的意義を正確に射抜いているだろう。最近、Kavaler-Adler,S. (2003) も指摘するように、Freudの対象関係論への貢献としては、対象関係、対象の内在化、対象喪失に伴う健康な悲哀を結びつけたところにある。そして、「健康な悲哀」とは、まさに分離に伴う「痛み」を体験できるかどうかにかかっているのである。

さらにOgdenによると、Freudは、「悲哀とメランコリー」の後半においては、メランコリーにおけるサディズムの問題にまで進み、対象との自己愛的同一化が実は憎しみと性愛と結びついた、より強固なサディスティックな絆に支えられていることにまで言及しているという。Ogdenの考えによると、これは、Fairbairn,W.R.D. (1944、1946) のリビドー的自我と興奮させる対象との、愛と憎しみの混交した関係性を先取りしている考え方である、という。これを敷衍すれば、今日の対象関係論の病理的組織化論にも繋がるような、愛と憎しみの倒錯した自己と対象との関係性を、Freudが視野の片隅に捉えていたと見ることが出来るかもしれない。

以上より、対象関係論の源泉としてのFreudの着想には、従来指摘されてい

たような「対象の取り入れとそれへの自我の同一化」等の対象関係論的思考の萌芽ばかりでなく、「分離に伴う痛み」や「倒錯的な対象関係」など今日の最新の対象関係論にまで繋がるような、豊かなアイデアの源泉が宿っていたと理解することができよう。

2) 対象関係論の二つの大河：Klein,M. と Fairbairn,W.R.D.

Freud, S. 以後、対象関係論の豊かな源泉を汲み取り、それぞれ独自に展開した人物として、Klein,M. と Fairbairn,W.R.D. がいる。ふたりは、自らの臨床理論の中に、自己と対象という二者の構図を明瞭にうちだし、Freudの欲動論中心の一者心理学から、二者心理学という新しい心理学の地平へと飛び立った。だが二人の着地した地点は、その景観をさまざまに異にし、同じ対象関係論という枠にもかかわらず、似て非なる面も少なくない。それは、KleinがFreudの欲動論を積極的に継承し、Freudの後継者たらんとしたのに反し、FairbairnがFreudの欲動論を積極的に批判する中で、自らの独自性を打ち出そうとしたことにも、端的な相違が見て取れよう。

本項では、今日の対象関係論の礎を築いた、KleinとFairbairnの考え方を対比的に比較検討することにより、対象関係論の多様な意義を整理、検討していきたい。

a) 内的対象の起源

対象関係論という用語は、Fairbairnが1940代から50年代に使ったのに端を発すると言われている（相田,1995; Ogden,T.H.2002）。すなわち、Fairbairnがその用語の生みの親ということになるが、Kleinも子どもとのプレイ・アナリシスの中で、内的で幻想的な対象関係世界を十全に描き出し、今日の対象関係論を導いた創出者の一人であることに間違いはないだろう。

先の項で述べたように、対象関係論の幕開けとなったのは、Freudが実質的に内的対象の存在を素描したことから始まった。それまでFreudは、対象という用語を使いこそすれ、それはリビドーや衝動の向かう先の、目標としての対象という位置付けに過ぎなかった（Mitchell,S.A.1981）。それが、「悲哀とメラン

コリー」において、自我と対象との内的連関性を描き出したことにより、対象の持つ意味合いが大きく転換したのだった。

このように、対象関係論にとって、対象の位置付けは、その歴史の最初から重要な意味を持つ。KleinとFairbairnは、両者とも内的対象概念を自己の理論の礎石としているが、両者のそれへの意味付けは、二人の対象関係論を大きく分かつ要因ともなっているし、その後の対象関係論の潮流を二つに決定づける遠因ともなっている。それゆえ、ここで両者の内的対象の位置付けを少しく詳しく比較検討したい。

内的対象の概念化において、KleinとFairbairnでは対極的な方向を向いている。Grotstein, J.S. (1994) も言うように、Kleinは、その概念化に当たって、Freudのメランコリー・パラダイムに基づいており、自我が対象を傷つけたイメージを、自我の中に取り入れたものが内的対象である。一方、Fairbairnのそれは、対象側の失敗に起因する悪い対象をコントロールするために、その悪い対象を自我の中に内在化したもの、という概念化である。

ここにおいて両者は、まったく逆方向から対象の姿を見ようとしている。すなわち、Kleinにとっては、内的対象は自我の攻撃性や欲動の影響下のもとに生み落とされた、自我の創造物という色合いが濃いのに反し、Fairbairnにおいては、現実の対象の失敗が内的対象として内在化されるという論理立てなので、自我は受身的である。Fairbairnの乳児は、外界からの攻撃性に無力で、自らは欲望を持たない、「無垢な乳児」(Grotstein, J.S.1994) であり、Kleinの積極的に憎み愛する乳児とは、著しい対称をなす。

但し、付言すれば、Kleinの対象の起源に関する考え方には、細かく見れば年代による違いを指摘することができる。それをMitchell, S.A. (1981) は、次のようにまとめている。1、生得的知識としての対象、2、自己の投影による創造物、3、死の本能に対処するための異物、4、現実の他者を内在化したものとしての対象。Mitchellによれば、Kleinは、抑うつポジションを概念化していく後期になるほど、現実のよい親像が取り入れられ、過酷な内的対象像が修正されるという、現実の影響を配慮しだしたという。だが、Kleinらしさがもっとも出ているのが、2と3の欲動や本能の投影による対象の創出という側面に

あることは、異論のないところであろう。

このように、Klein と Fairbairn では、対象関係論の要諦である対象の創造において、すでに別の視界を見ていた。したがって、その後の発達論や人格形成論において、大きく歩を異にしたことは首肯できるところだろう。彼らのその後の発達論等に関しては、すでに成書がさまざまに出版されているので、ここでは解説しないが、次の項では、彼らのその後の発達論、パーソナリティ論の異同について検討したい。

b) 欲動論と環境論

先に述べたように、対象の起源の概念化の違いは、そのまま彼らの発達論、パーソナリティ論の相違として色濃く反映された。それを端的に表現すれば、欲動論と環境論の違いとまとめることができるだろう。

Klein が、妄想分裂ポジション、抑うつポジションとして概念化していった道筋（1935、1940、1946）は、自己に属するリビドーと攻撃性の欲動が、対象との投影同一化による被害的な関係性を形成する様態から、いかに自己の内側に統合され、主体性と責任性を帯びた個人として誕生するか、という発達論、パーソナリティ論である。ここにおいては、欲動を自らの責任のもとに主体化した、個人の生々しい息づかいが伝わってくるものがある。

一方、Fairbairn においては、Freud の欲動論をニュートン物理学的で「時代錯誤だ」と批判した（Fairbairn, W.R.D.1946）ところから始まった。そして彼は、「リビドーは快感希求的ではなくて、対象希求的である」という有名なテーゼを高らかに宣言したのだが、乳児の対象希求（乳児的依存）を対象側が受け損なうことに、パーソナリティ構造化の手始めの契機があるとする点で、彼は環境論者と言えるのである。

彼らの異同にさらに入る前に、本項の論点を明確にするために、少し Fairbairn のパーソナリティ論を振り返りたい^{注3)}。

彼は1943年の論文で、対象の失敗を内在化するのは、親の良さを保持するためである、と明言する。親の悪い側面を内在化し、一次的同一化によって、自我がその悪い対象と内的に関係を形成するようになれば、親の悪い側面を心の

中で万能的にコントロールできる空想を持つことができる、というのだ。そして、興奮させる対象—リビドー的自我、拒絶する対象—反リビドー的自我という、悪い内的対象関係を中心に構造化された姿を示したのが、彼のパーソナリティ論である。

Fairbairnは、この基本的構想を、彼の研究の出発点であるスキゾイド・パーソナリティ論（1940）でもすでに含蓄させていた。彼のスキゾイド論の要諦は、人格の基盤やあらゆる精神病理の根底には、スキゾイド状態が多かれ少なかれ潜在しており、それは、情緒的な引きこもりや内的現実へのとらわれを形成し、成熟した人格への統合を阻んでいる。そして、このスキゾイド状態をもたらすのは、親の「拒絶」であり、それは乳児の心に「虚しさ」を埋め込む。それがスキゾイドの非現実感のもとを形成している、というのだ。

Kleinとは違い、Fairbairn理論では、「抑うつ」や「怒り」が中心を占めるのではなく、「虚しさ」に意味の重みが置かれている。したがって、Grotstein, J.S. (1994) の指摘するように、Kleinの妄想分裂ポジションは、憎悪のために、まずは妄想的であり、次にスキゾイド（分裂）的となるが、Fairbairnの分裂ポジションは、自我の中の違和化のために、はじめからスキゾイド的なのである。

Fairbairnのスキゾイド状態の研究は、Winnicott, D.W. (1960) の「偽りの自己」やLaing, R.D. (1965) の「引き裂かれた自己」の先鞭をつけたものとも言われるが（Grotstein, J.S. & Rinsley, D.B. 1994）、乳児は環境に対して拒絶されたり、侵襲を受けたりするだけのひどく受身的な存在として描かれている印象はぬぐいきれない。そのうえ、Fairbairnの対象関係論は、Kleinの投影同一化のような理論を想定しなかったので、外的対象にプレッシャーを与えるような対象関係を扱えなかった（Kavaler - Adler, S. 2003）とも言われている。したがって、彼のスキゾイドは外的内的にひきこもっているだけのような状態として、静まり返っているかのようだ^{注4)}。

結局のところ、個人内部の欲動を積極的に想定しないということは、同時に主体性の根拠も脆弱なものとする。それはFairbairn理論のひとつの弱みとなるが、Kleinのように、環境の影響を少なく考え、悪い対象も個人の投影物だと

する論理立ても、あまりに「悪」の責任を乳児に押し付けすぎる憾みがなきにしもあらずである。この辺の難題を解決するためには、Bion, W.R. の登場を待たねばならないが、それは後述するとして、「欲動論」と「環境論」の相違が、彼らの治療論においてもどのような異同をもたらし、それぞれどのような意義を認めることができるのか、次の項で考察したい。

c) 治療論

欲動論と環境論の違いは、治療論においても二人の間に大きな懸隔をもたらした。それは端的に言えば、治療的方策において、個人の欲動や葛藤を解釈によって意識化することを目指すか（「洞察モデル」）、環境側が良いものを提供するか（「提供モデル」）、の違いである。

Kleinは周知のように、子どものプレイ・アナリシスにおいても解釈を重視したし、後年大人の精神病やうつ病の分析に進んでも、精神分析技法の基本原則を忠実に守ろうとした。そして、結局のところ、抑うつポジションのワーク・スルーを治療目標に置き、一次対象に対する自らの破壊性への気づきと、一次対象への感謝の念に基づく「償い」の作業を、転移を通して成し遂げることを主眼とした。こうして人は、精神分析を通して、生の本能と死の本能を好ましく融合し、主体的に引き受けることができる個人として、生まれ出ることができた。

このように Klein の治療論は、対象との関係性を通して、自己の欲動、願望、不安を洞察することによって、愛によって憎しみが中和化され、それによって自己が主体化されていくプロセスを描いた「洞察モデル」と見ることができる。

一方、Fairbairn のそれは、パーソナリティ形成における環境因の重視そのままに、環境としての分析家と患者との現実的な関係性の影響力に、重きを置いている。Fairbairn, W.R.D. (1958) は、患者を横に寝かせ、分析家が彼の背後に座ることは、患者の早期の外傷の反復になると考え、患者に直面して椅子に座る機会を与えた。そして、分析家との安全で信頼感のある現実的關係がなければ、患者は内的な悪い対象を放棄できないと考えた。したがって、Fairbairn は、Klein とは対極的に、解釈よりも分析家との現実的關係を重視したのであ

る。Guntrip,H. (1975) も言うように、これらのセッティングを、Fairbairnはフレンドリーで治療促進的になるものと考えた^{注5)}。

Fairbairnの治療論が「提供モデル」であることは、明瞭だろう^{注6)}。

Kavaler-Adler,S. (2003) の言うように、Fairbairn的環境論では、主体の位置、欲動を持つ自己という観点が希薄なゆえ、Kleinのようなモーニングの観点は生まれにくい。環境（治療者）による癒しhealing的なニュアンスが濃くなる。よって、個人が自ら内的欲動に自覚的になることによって、主体化される積極的な心の営みが治療論の中で弱く、やはりここでも受身的である。だが、Grotstein,J.S. & Rinsley,D.B.(1994)が言うように、Fairbairnは、子どもの虐待、多重人格、外傷などのたくさんの臨床的理解を提出した。今日の外傷論の先鞭をつける、環境要因重視の視点を精神分析の中に導入したことの意義は少ないのである。

Klein,M.とFairbairn,W.R.D.の特色や異同は、そのままかなりの部分を今日のクライン派と独立学派が継承し、それを基盤にそれぞれ臨床的、理論的な発展を遂げている。その意味で、彼らの臨床研究は、今日の対象関係論の二大学派を根底から基礎付けた、真に偉大な達成なのである。

以上、ここまでKleinとFairbairnの主要な臨床的、理論的貢献の比較検討を行ってきた。最後に、彼らの細かくはあるが看過できない異同を簡単に整理することで、この項を終えることにする。

d) その他の異同

最初に、KleinとFairbairnでは、不安の起源においても考えを異にしている。これを一言で言ってしまうと、依存に着目しているのか、攻撃性に重きを置いているのかの違いになるだろう。

Fairbairn,W.R.D. (1955) は、出産外傷における分離の不安を防衛するために、他者との関係性を求める一次的同一化が発動すると唱えた。「同一化の力動は、他者への子どもの絶対的なニードにある」。すなわち、乳児は依存を通じて分離の不安を防衛し、安全感を獲得する。「Fairbairnは、攻撃性をプライマリーとは考えない。リビドーのコンタクトが断たれたところから来る、反応的な現

象」(Gomez,L.1997)なのである。

一方Kleinが欲動、なかでも攻撃性を軸に、不安理論を打ち立てたのは先に述べたとおりである。このあたりの考え方の相違(すなわち攻撃性が依存か)も、現在の独立学派とクライン派のそれとして、そのまま受け継がれていると見てよいだろう。

次に、無意識的空想概念に関してだが、環境論者のFairbairnにとっては、欲動の派生物たる無意識的空想は、さして重要な意味を持たない。外的現実が付随する二次的な役割を負うにすぎない。

一方、クライン派にとっては、「あらゆる心的過程の一次的内容は、無意識の空想であり、あらゆる思考過程の基礎を成している」(Isaacs,S.1948)というように、クライン派対象関係論の根幹を支えるほどの重要な意味を持つ。なぜなら、Mitchell,J. (1986)の論じるように、Freudの本能論では、対象は主体にとって単なる欲求充足の“物”でしかないが、無意識的空想概念によって対象と自己との力動的関係性を描くことができるようになったからだ。たとえば、主体が対象を本能的に求めるのは、その基底に願望充足的空想が働いているがゆえに、自己の欲動は対象に向かう、となる。

無意識的空想概念によって、精神分析は、内的主観的世界を内包した、実存的な人間の姿を描写できるようになったと言えるのである。

3) 対象関係論の二派：クライン派と独立学派

KleinとFairbairn以後、対象関係論といえは、一般的にはクライン派と独立学派の二派を指す。狭義には、独立学派のみを言う。

歴史的な経緯を遡れば、イギリス精神分析協会は、Klein,M.とFreud,S.の娘であるAnna Freudとの間に闘わされた、特に子どもの精神分析を巡っての熾烈な論争の後(King,P. & Steiner,R. (ed.)1991)、クライン派と自我心理学派の二派に分かれた。だが、現実には、その両派ともに属さない、第三の党派として独立学派が生まれたのである。その中のクライン派と独立学派の二派を広義に対象関係論学派という^{注7)}。

ただ、対象関係論と言っても、正確な定義を持たないし、たくさんの異なっ

た理論的観点を含んでいる（Hinshelwood,R.D.1991）。Guntrip,H.（1971）は、対象関係論は対象関係論学派にも自我心理学派にも共通に認められる、精神分析の基本的な考え方を含んでいるがゆえに、「対象関係論的な考え方」と言った。

したがって、対象関係論全体を一括して論じるのには無理があるが、本項では、それぞれの学派の主な違いを検討してみたい。ただし、すでに先に述べた Klein と Fairbairn の異同と重なる部分も多いので、簡潔に記載したい。

クライン派には、Klein,M. 以後、第二世代の三傑として、Segal,H.、Rosenfeld,H.、Bion,W.R. が輩出され、その彼らに教育を受けた第三世代として、Britton,R.、Steiner,J.、Feldman,M. が今日のクライン派三傑として数えられている（松木、2004）。クライン派は、今日、「投影同一化理論」から、「病理的組織化」「自閉症」研究に進んでいるように、体系的な臨床理論の発展に貢献し、無意識探索的な精神分析の伝統を継承している。

一方、独立学派には、Fairbairn に理論、実践両面において近接していたり、強い影響を受けたりした、Winnicott,D.W.、Balint,M.、Bowlby,J.、Guntrip,H. らがいる。矢崎（2002）によると、独立学派は、「ゆるやかな同志の集まりであった」、「理論的には折衷的あるいは統合的になるし、実践上は臨機応変であり」、「技法も一定せず、各個の精神分析家によって大きな変異と幅が生じる」とのことである。

クライン派が理論的、実践的にも純型集団に近ければ、独立学派は、内部に多様性と幅を含んだゆるやかな党派と見てよさそうである。

今日、二つの学派は極めて近接してきた（Spillius,E.B.1988）と言われるが、それでもいくつかの点で、理論、技法両面にわたる原理的な相違が認められる。ここではそのいくつかを取り上げたい。

a) 欲動か環境か

この問題に関しては、Klein と Fairbairn の異同を、そのまま受け継いでいる。しかも、クライン派と独立学派を色分けする、端的な指標のひとつになりうる（岩崎、1977）。ただし、次章で述べるように、Bion,W.R. の登場によって、こ

の垣根もかなり低くなった感はあるが、それでも双方への比重の掛け具合に両派の色合いの違いを読み取ることは可能だろう。

クライン派が治療的に目指し、目標とするところは、Kleinの時代とさほど大きな違いはないように思われる。逆転移の臨床的活用や病理的組織化など、Klein以後、大きく発展させてきた理論や実践は数あるものの、結局のところ最終目標は、「モーニング・ワーク」あるいは「抑うつポジションのワーク・スルー」に尽きている。ただ、同じモーニング・ワークでも、Kleinのように、愛と憎しみの葛藤を体験し、「償い」の念を抱く「ギルティ・マン」に治療像を見るよりも、Steiner, J. (1993) の登場によって、「対象喪失の経験」といった分離の課題に、より焦点が当てられてきた感はある。だが、いずれにしろ、個人の課題を「罪」や「喪失」の内的体験に置くという、内在論である。

独立学派は、一様に環境の役割や責任を問うことにおいて、共通性が認められる。ただし、その中でも細かな違いは存在している。

たとえば、意外なことに、Winnicott, D.W. & Khan, M.M.R. (1953) は、Fairbairn理論を一部批判している。そのひとつとして、Fairbairnの言う一次的同一化や前アンビバレンツ概念が、Fairbairn自身の唱える対象希求という視点と矛盾しているのではないか、ということである。すなわち、Winnicottは、Fairbairnが対象希求という視点を主張することによって、誕生時には自我が存在し、対象とは分離した存在だと示していることに、異を唱えた。なぜなら、Winnicottにとっては、生下時には、乳児と環境は一体化した関係（絶対依存）を形成しており、自己と対象（環境）は分離していないからである^{注8)}。

この点で、諮らずも Fairbairnはクライン派と同じ立場に立っている。言うまでもなく、クライン派はKlein, M.の主張どおり、誕生直後からの自我を想定し、それゆえにこそ対象とは分離した存在として、最早期の原始的対象関係を営んでいると考えるからである^{注9)}。Fairbairnは、この点だけを見れば、独立学派の中では異質である。

このように、対象の生下時での位置づけに、独立学派内部でも見解の相違は認められるが、彼らがひとしなみ環境要因に重きを置いていることでは共通しているのである。

独立学派が環境要因を重視していった経緯として、精神分析の理念の問題ばかりでなく、彼らの小児科医や精神科医としてのキャリアも大きく関係している、と思われる。周知のように Winnicottは、小児科医として、何万もの乳児と母親との関係を観察したと言われるし、それ以前の1939年には、ロンドンから疎開した子どもたちの大規模な調査に、政府の要請で関わっていた（Grosskurth,P.1986）。Bowlbyも、第二次世界大戦後、WHOの要請で戦災孤児などの観察や処遇に携わったのは周知のとおりである^{注10}。母性剥奪の現実を目の当たりにして、彼らが環境側の責任を鋭く問う心根に傾いたとしても、むべなるかな、と言えよう^{注11}。

他の独立学派では、Balintは、医学との連携を含む多様な関心に移っていったし、Guntripも牧師として、具体的援助に関心のある人だった。

こうして見ていくと、独立学派の分析家には、精神分析の枠に留まらない、関連領域での多様な関心や活動領域を持っている人たちが少なくないのである。そして、彼らが環境要因に比重を置けば置くほど、精神分析の枠が窮屈になったかのように、多方面での活躍を示すようになっていった。

b) 環境モデル（提供モデル）の陥穽

クライン派が、環境を重視せず、個人の欲動や本能ばかり重視するといって批判があることは、すでによく知られているところなので、この項では、あまり語られることのない、環境論への批判を俎上に乗せたい。

Kleinが患者の病理を患者自身の内的な責任に帰して、患者を苦しめたとすれば、Winnicottは同様の意味で、家族の方を悩ませたと言えるかも知れない。彼は、精神病を「環境欠損病」と形容し（Winnicott,D.W.1949,1952）、多くの統合失調症家族を結果的に苦しめた。Winnicottは、Klein, M.が性格上環境要因を取り入れることが難しい人だと批判したが（1962）、彼自身も環境責任論からくる環境側の痛みに暗くなっていた面があるのかもしれない^{注12}。

さらに、もうひとつの問題が、環境モデルから持ち上がった。環境論が、治療論においても愛情の欠損を補おうとする提供モデルになりやすいことは、既に前節で述べたが、ここに思わぬ陥穽が待ち受けていた。

提供モデルが、治療者側の善意や愛情を強調し、患者の養育上での愛情欠損をできるだけ補填しようとする治療態度になりやすいことは、多かれ少なかれ、共通しているところだろう。それは、精神分析の基本原則である中立性や受身性の枠を踏み越えるところがあるが、この問題は、歴史的にはFreud,S.がFerenczi,S.の「積極技法」や「弛緩技法」を批判したところまで遡る（小此木、1985）。Freudは、Ferencziの治療技法が、患者に現実的な愛情を与えるので、禁欲原則を遵守する精神分析に反するものだと厳しく批判した。

その後、Ferencziの治療論は、Alexander,F.の「修正感情体験」という現実的な治療関係の重視の視点につながったが、独立学派の中でも、Ferencziから影響を受けた人は少なくない。なかでも、Balint,M.はFerencziからハンガリー学派として直接教育分析を受けた直弟子である。

Balint (1968) は、Ferencziに従い、患者との間で、身体的接触を含む「共にいること」を重視した。これによって、身体レベルで患者の内的経験に触れることができ、患者の「基底欠損」を癒すことができると考えた。Khan,M. (1974) によると、Balintは、少なくとも1セッションに1回は、「共にいること」の身体的表現として、患者の親指を握ったという^{注13)}。

愛情の提供というモデルが、身体接触にまでつながりやすいのは、次に示すように、誘惑的で危険な流れと言える。

Winnicottも、その意味で、分析的な治療枠をかなり踏み越えた人だった。WinnicottはLittle,M.I.との分析の中で、Littleのアクティング・インに対して、部屋を出て行ってしまったり、時間を延長したり、手を握ったりなど、さまざまな「踏み越え」を実践した（Little,M.I.1990）。Hopkins,L. (1998、2000) は、Winnicottが分析的枠組みを守る上で重大な困難を持った人だと断じている。

Winnicottのこの姿勢が単に彼自身の問題に留まらないのは、彼の患者でも弟子でもある、Khan,M.M.R.がさらに逸脱した問題行動を頻発したからであった。Khanは、身体的接触の延長上で、たくさんの患者と性的交渉を持ったといわれるし、患者の分析中にも関わらず電話に出て、ホモセクシャルのジョークを飛ばしていたりしたという（Godley,W.2001）^{注14)}。

愛情の提供ということが、治療者側の自制心を時に薄くしてしまうことの危

険性について、私たちは、これらの「事例」を教訓にして自戒的に学ぶ必要があるのだろう^{注15)}。

c) 死の本能をめぐる

この節の最後に、これもクライン派と独立学派を分かつ指標となりうる、「死の本能」をめぐるの議論を紹介したい。

周知のようにKlein,M.はFreud,S.に準じ、「死の本能」の存在を認めた。彼女は、人間には生得的に、死の本能の現れである破壊性が備わっていると考えた。これが、自我心理学派や独立学派など、他学派の猛烈な反発を呼んだことは、よく知られているところだろう。

この問題に関しては、1971年にウィーンでの国際精神分析学会で、「攻撃性に関して」というパネル・ディスカッションが持たれた（Lussier,A.1972）。メンバーは、Joseph Sandler、Hanna Segal、Rudolph M.Loewenstein、Avelino Gonzalezといった、それぞれ立場を異にする分析家が集まった^{注16)}。この種の集まりによくあるように、同じ「攻撃性」という言葉を使っているが、各人が指す現象に違いがあるので、話は必ずしも噛み合っていないが、いくつか興味深い議論が闘わされている。

まず、Segalや後に聴衆としてディスカッションに加わったRosenfeld,H.は、ともにクライン派の立場から、死の本能の存在自体は、本当かどうかは知りようがないと、明言している。それは、理念的な概念であり、クライン派が重視しているのは、臨床的現象を説明する上で、それが有用になりうる点である。と。Rosenfeldは、一次的攻撃性や一次的自己破壊性の臨床的現象は観察されうると述べているし、Segalは、一次的攻撃性の概念は、幼児における不安や葛藤や罪悪感を説明するのにとても有効であると論じている。

ここで興味深いのは、クライン派が、死の本能概念が思弁的なものであることを認め、その不毛な議論を避けるため、臨床上の説明概念に近づけようとしていることである。クライン派にとっても、Klein,M.が打ち出した「死の本能」は、もはや机上の問題に過ぎなくなり、「攻撃性」として様相を変えて、臨床の舞台の上に降ろされたと言えよう^{注17) 注18)}。

約20年後、Segal,H. (1993) は、「死の本能」問題に関して、ふたたび発言した。彼女はその中で、20年前の主張どおり、臨床的現象の説明として有用となりうる死の本能概念を、4つの臨床素材を生き生きと描写することによって、論証してみせた。彼女がここで新たに付け加えている視点としては、Freud,S. は死の本能が自我から逸らされて、対象に向かうことを述べ、Klein,M. は死の本能が投影されて、迫害不安になることを説明したが、彼女はそれに加えて、死の本能は、心的苦痛を避けるために、自己の中の生の部分に対する攻撃として活動すると論じている。これは、パーソナリティの病理的組織化論とも重なるような、依存的な自己や健康な自己に対する内的対象からの攻撃のことを指していると思われる。死の本能概念の臨床的発展の、ひとつの成果であろう。

さて、ここで「死の本能」問題に関する、独立学派の見解を整理しておきたい。

独立学派にとっては、攻撃性は二次的、反応的なものという視点で、党派的には一致しているようだ。

そもそも Fairbairn,W.R.D. (1944) も、攻撃性を一次的なものとは考えず、中心自我がリビドー自我の欲求の大きさを制御するために必要な「調整機能」の一面を持つとみなしたり、リビドーによる接触が阻まれたときに生じる、二次的なものだと考えたりした。Fairbairn理論の解説者としても有名な Guntrip,H. (1971) になると、もっと端的に、内的迫害対象関係は、早期の親との関係性のコピーであると断じ、攻撃性は自己の内側には帰せられず、対象側の問題として投げられた。

このように、死の本能や一次的攻撃性に関しては、独立学派は一様に否定的だが、人間が攻撃性を持つこと自体に関しては、学派内でも温度差はあるようだ。

WinnicottはFairbairnとは違い、イド衝動を容認しているので、彼は、対象希求性とイド欲求の両側面から、対象関係を考察する。そして、攻撃性も「原初的な愛の衝動においてわれわれが反応性の攻撃性を見出すことはいつも可能」と、反応的なものとみなしていたり、あるいは「幼児に外的対象を必要とさせるのは、この衝動性であり、そこから発展する攻撃性なのである」と述べたり

して（Winnicott,D.W.1950～55）、攻撃性を「運動性」「自発性」へと繋がるような、いわば良性の攻撃性を想定しているようだ。

Balint,M.もWinnicottと同様に、快感希求と対象希求の両側面から対象関係を考え、Fairbairn理論が本能衝動の面を重視していないとあって、批判した（Balint, M.1957）。だが彼も、破壊性は本来「一次愛によって受容され肯定されるもの」（Balint,M.1952）であり、それによって「一種の完全な調和」が生じ、個人の成長が促進されるものである、と考えた。一次愛によって、攻撃性に対処する環境側の包容が強調されているので、Winnicottの「母性的没頭」概念と似る^{注20}。

また、Bowlby, J.は、Kleinと同様に、モーニングにおける攻撃性の役割を強調したが、それは去っていく他者に対する健康なりアクションという意義を持つものと考えた（Kaveler-Adler,S.2003）。一方Kleinは、モーニングのプロセスにおいても、攻撃性は、「償い」を必要とする、罪深さを含有したものと考えており、Bowlbyの言うような攻撃性の健康さという視点には、やはり乏しい。

こうしてみると、そもそも Klein,M.は、人間の破壊性を本性的に避けられないものと考え、死の本能の投影としての迫害不安から、自己の破壊性の認識による「償い」へという成長過程を描き出し、さらにその後のクライン派は、臨床的説明概念として、生の痛みを避けるための、防衛としての破壊性に着眼点を広げた。これが既に述べたように、次章に述べる「病理的組織化論」につながる観点を孕んでいた。

一方独立学派は、破壊性を愛情希求へのフラストレーションからくる反動的なものともみなしたり、あるいは愛によって包容され、健康な発達や自発性につながるような良性のものと考えたりして、破壊性の病理的側面に関しては言及が乏しい。

これは結局のところ、両者の人間観、治療観の相違であり、ここで両者の是非を問えば、これまで述べてきた環境モデルか葛藤モデルかの論議の蒸し返しになろう。

鳥瞰的視点に立てば、対象関係論は、クライン派と独立学派が批判的討論を交わす中で、お互いが身を持って「攻撃性」の認識や包容を実践し、その建設

的な生かし方を体現してきたと言えるのかもしれない。

Ⅲ 対象関係論の近年の動向

1) 環境モデルと葛藤モデルの統合：Bion, W. R.

先の章で述べてきたように、対象関係論には環境因を重視するか、個人の欲動や葛藤を重視するかで、二派に色分けできる傾向があった。そして、単純化すれば、前者の場合、乳幼児期に与えられなかった愛情や世話を、治療者や環境側が提供する必要があるという、「提供モデル」が治療論になりやすかったのに比べ、後者の場合は、精神分析の伝統である、転移解釈やそれを通しての不安・葛藤の意識化を重視する「洞察モデル」がそれに相当した。病因論の視点に立てば、前者は、愛情の欠損が病理を醸成させ、後者は内的葛藤に基因して心の病が発生するという意味で、「欠損モデル」と「葛藤モデル」と言われることもある。

環境か、内的葛藤か、という一見二律背反的な別々の視点を、臨床に裏打ちされた革新的な着眼で統合させたのがBion, W.R. の仕事 (1957, 1959, 1962a, 1962b) だった。彼は、Klein, M. の投影同一化理論を敷衍、発展させ、コンテイナー／コンテインド論という、独創的な治療論を展開した。ここにおいて、個人（自己）と環境（対象）との関わりは、対象側のもの想い (reverie) の機能を媒介として、個人の中に情緒や意味が育まれるという、環境と内的葛藤との有機的な連結がもたらされた。

だが、Bionのこの業績は彼一人の力で成し遂げられたものではない。そこに辿り着くまでには、先学や同僚たちのたゆまぬ研鑽が積み重ねられていた。まずは、Bionの業績に入る前に、先人たちの歩みを押さえておく必要があるだろう。

Klein, M. が1946年に「分裂的機制についての覚書」で投影同一化に初めて言及して以来、投影同一化理論はクライン派の中で、もっとも熱心に研究され、臨床的にも検証されてきた理論のひとつと言えるだろう。

まず、Klein自身は、この理論を乳児の最早期の不安と防衛を論じる中で、攻撃的な対象関係の原型をなす、特殊な形の同一化であると定義した。すなわ

ち、自己の攻撃性が対象の中に排出されるという無意識的空想によって、迫害的な対象関係が醸成されるのである。Kleinは、これ以後投影同一化概念を発展させることはなかったが、Kleinの言う意味での投影同一化は、攻撃性や自己の一部を対象の中へ投影するという、「排泄」機能に力点があったと言ってよい。

Klein 以後、投影同一化概念の発展のターニングポイントになった人物として、Heimann,P. (1950,1960) が挙げられよう。彼女は、これらの論文の中で投影同一化という用語こそ使わなかったが^{注21)}、彼女の論点は、患者の無意識を治療者の逆転移によってキャッチすることも可能だということにあり、まさに投影同一化を通しての患者の無意識の理解、というテーマとして見ることができる^{注22)}。

その後、投影同一化概念は、Spillius,E.B. (1988) の総説に見るように、クライン派の中でホットな議論が重ねられ、さまざまな臨床家がこの概念の発展に寄与してきた。たとえば、Grinberg,L. (1962) は、「投影逆同一化」概念を提唱し、患者によって喚起される分析家の中の反応の仕分けを問題にしたし、同様に Money-Kyrle,R. (1956) も、分析家の中には償いの念や親的な心からくる、患者に対する思いやりがあり、それを患者の投影同一化の理解に利用できる「正常な逆転移」として、病理的なものと区別した。他にもさまざまな貢献があるが (Segal,H.1964;Joseph,B.1987)、今日的意義としては Rosenfeld,H. (1971) のまとめが要を得ている。

彼は投影同一化のタイプをその用途に応じて6つに分けた。すなわち、1、コミュニケーションの手段、2、心的現実の否認、3、分析家の心と身体への万能的コントロール、4、羨望への対処、5、寄生的対象関係、6、幻覚や妄想の一形態、である。Kleinが自己の不要な部分や悪い部分をスプリットし、対象の中に投影することによる破壊的对象関係を描いたとすれば、Rosenfeld の分類は、コミュニケーションや万能的コントロールなどの、いわゆる対象関係の質の吟味に主たる関心が移っていると見てもよい。

この投影同一化概念のコミュニケーション側面に、光を照射する端緒を開いたのが、Bion だったと言ってもよいだろう (Meltzer,D.1982;Hinshelwood,R.D.

1991; Grinberg, L. 1990; Bléandonu, G. 1994; Biran, H. 2003; López-Corvo, R. E. 2003)。

たとえばHinshelwood, R. D. (1991) は、Bionが投影同一化概念に正常なもの
と病的なものとの区別をもたらし、前者においてはそれがコミュニケーション
の手段として用いられていることを明確にしたと、高く評価している。同様
に、Meltzer, D. (1982) も、Kleinの言う意味での投影同一化は異物の侵入とい
う意味合いが強いので、侵入的同一化intrusive identificationと言うにふさわし
く、投影同一化はもっとBionicな意味でのコミュニケーション重視として採用
されるのがよい、と論評している。

さらに、Bionは、この域にとどまらず、投影同一化概念に革新的な新機軸の
発想を打ち出していった。それが乳児や精神病者の心を読み取る“対象の機能”
のテーマである。その端緒となった論文を少しく詳しく見ていきたい(祖父江、
2004a)。

Bionは「傲慢さについて」(1957)において、彼が精神病の3要素と考える
「好奇心」「傲慢さ」「愚かさ」の特徴を示す患者を提示した。患者の投影同一
化は過度で、混乱と離人感がたやすく表面化し、しかも患者の連想は、「だれ」
や「どこへ」という文法を欠いているので、言語的コミュニケーションは不可
能なように思われた。そして、分析は停滞した。

患者はある日、分析家としてのBionには「それが耐えられない」と発言した。
Bionはこの言表を手がかりにして難局の打開を試みようとして、さまざまに考えを
巡らす。“それ”とは何か？ Bionはなにやら自分が「妨害する力」や「迫害的
な対象」と患者からみなされているように感じる。だが、“それ”が何かははっ
きりとはわからない。

Bionは、「妨害する力」が患者の精神病の要素である「傲慢さ」「愚かさ」と
も関連していることに気づく。そして逆転移を頼りにして、自分が患者から言
語的交流に固執していると感じられており、患者のコミュニケーション手段で
ある投影同一化を攻撃する「妨害する力」と同一化されていることを認識する。
すなわち、Bionは、患者から見れば、「傲慢さ」「愚かさ」によって、患者の非
言語的コミュニケーション手段である投影同一化の能力を破壊しようとする
「妨害する力」と映っていたのだ。

もとより、この「妨害する力」は、そもそもは患者の中の精神病的部分が Bion に投影されたものである。よって、そう解釈することも可能だ。だが Bion は、患者の投影を、そう突き返すのではなく、まずは患者と分析家をリンクするものとして、分析家は“入れ物 receptacle”になる必要性を説いた。

このテーマは、「連結することへの攻撃」（1959）において、さらに洗練され明確にされた。

Bion は、対象の機能としての「入れ物」のモデルを乳児と母親との関係によって説明する。母親は乳児の泣き声を、母親に向けて「言い知れぬ恐怖」を投げ入れてきているものとして受け取り、その恐ろしい感覚を「もの想い」の能力によって咀嚼し、乳児に耐えられる感情にして返していく必要がある、というのだ。

ここで大事なものは、乳児の泣き声は、ある面確かに母親を苛つかせる“攻撃的現象”なのだが、母親はたとえばそれを「苛立ち」や「敵意」の表出と皮相的に“理解”するのではなく、その現象の背後にある乳児の「言い知れぬ恐怖」や「絶望」を“もの想う”必要があると言うのだ。攻撃性の背後に、乳児の絶望や恐怖を読み取るという視点が、「もの想い」論の要諦になっていると考えられる。

また、もの想いの機能は、乳児の恐怖を単に理解して終わるということではなくて、その理解がふたたび乳児に伝え返される、というところにも大きな力点がある。すなわち、母親が咀嚼した乳児の恐怖は、まさに離乳食のように食べやすいものに変形し、それが乳児に伝え返されることによって、乳児も自らの恐怖の中身を吟味し、心の栄養素としての情緒的意味を保持できるようになっていく、というのである。

ここには乳児の恐怖が、環境としての母親との関わりによって、正しく情緒的意味を理解され、それが乳児の主体形成に寄与していくプロセスが描かれている。単に環境が愛情を与え、乳児の心の欠損を補うのでもないし、乳児が自分だけの力で恐怖を「洞察」していくのでもない。環境モデルでも、葛藤モデルでもない、環境と個人のいわば「幸福な結婚」が、ここには描かれているのである。

Bionは、この母子関係モデルを治療者－患者関係にも応用し、コンテイナー／コンテインド (Bion, W.R. 1962b) という布置として、治療関係における原始的コミュニケーションの様相を明らかにし、治療的意義も鮮明なものとした。これは、環境モデルと葛藤モデルを統合した治療論の提唱となっているし、環境側の理解が個人の心の中に情緒的意味を育むという、知的理解と情緒的理解の乖離を統合する治療論にもなっているのである (祖父江、2004b)。

Kleinの投影同一化概念の提示から始まった、対象関係論者たちの臨床研究の研鑽は、こうしてBionによって、環境モデルと葛藤モデルの統合された治療論という、実り豊かな果実を熟成させた。

Bionの貢献は、対象関係論全体にとっても、臨床的に枢要なひとつの到達点と言えるだろう。Bionが独立学派の分析家にも多大なる影響を与え、彼らからよく引用されるゆえんである (たとえば、Symington, N. や Bollas, C. など)。

2) 臨床研究の動向

近年の対象関係論、特にクライン派での臨床研究の目覚ましい進展としては、パーソナリティの病理的組織化研究と、自閉症研究が挙げられるだろう。前者は、統合失調症の臨床研究の知見が重症パーソナリティ障害へと応用されていったものであり、後者はタヴィストック・クリニックの児童分析グループの流れが生んだ、もっともアップデートな研究動向である。ただし、これらの研究に関しては、最近でも鈴木 (2004) や平井 (2004) の要を得た概説があるので、屋上屋を重ねることを避け、ポイントのみ簡潔に示し、その意義を検討したい。

a) 病理的組織化研究

病理的組織化研究は、歴史的には、Freud, S. の陰性治療反応の研究を嚆矢とするという見方は、ほぼ定説となっているだろう。その後、Kleinが、妄想分裂ポジション、抑うつポジションを定式化し、精神病におけるパーソナリティ構造を見る視点を与えた。その後クライン派の中では、Riviere, J. (1936) が、健康なパーソナリティ部分と並存する「躁的防衛システム」の概念を提出し、パーソナリティ内において個々別々に機能する人格部分を臨床的に描写した。いよ

いよクライン派における重篤なパーソナリティ障害の研究が本格的に幕開けとなったのである。

クライン派のパーソナリティ研究の解説に関しては、すでに松木（1990）、衣笠（1997）、鈴木（2004）等によって語られ尽くされている感があるので、ここでは大事なポイントのみ抽出したい。

まず、病理的組織化研究において、もっとも体系的な考えを提出した Steiner, J. (1993) によると、パーソナリティの病理的組織化が生み出されるのは、自己の良い部分と悪い部分との正常なスプリッティングが生じず、それらが断片化された後集塊化し、倒錯的に結びついているためであると述べている。すなわち、自己の中で単に良い対象関係と悪い対象関係がスプリッティングして、別々に機能しているというだけにとどまらず、悪い方が良い方を支配したり、搾取したり、利用したりするという、良いものと悪いものとの倒錯的で歪んだ関係性が、パーソナリティ構造内において病理化している、ということである^{注23}。

ここにおいて、私たちの心の中では、まるでギャングが善良な市民を支配するような、恐怖や脅しによる搾取的関係が、パーソナリティ内で一人芝居のように演じられ、それが外在化されて外的対象関係をもひどく困難にしてしまうという、新しい臨床理論が打ち出されたのである。

では、そもそもなぜ良いものが悪いものに支配され、絡み取られてしまうのかという成因に関しては、Rosenfeld, H. (1971, 1978, 1983) が既に述べている。それは、自己が内的な悪い対象に病的に依存するためだ、と。すなわち、空腹感に満ちたりビディナルな自己の怒りは対象に向けられるが、逆に原始的超自我対象によって責め返され、愛と憎しみの混乱した関係性が捏造されてしまう、と述べている。言葉を換えれば、依存的で健康な自己の怒りは、悪い対象によって自責的に意味を変容させられ、マゾヒスティックな対象関係へと絡め取られてしまう、ということだろう。

Meltzer, D. (1968) は、さらに一歩進め、悪い対象への嗜癖的服従によって、妄想性不安への保護が得られることを述べている。すなわち、悪い対象との倒錯的で嗜癖的な関係が崩れてしまうと、防衛されていた迫害不安が露呈し、精

神病的な解体がもたらされてしまう、と。Meltzerは、倒錯的对象関係が、より深刻な精神病性の解体を防衛している側面と、その防衛の裏にはさらに激しい迫害不安が隠されていることに言及しているのである。

倒錯的な内的対象関係の背後に、神病的な不安や解体への恐れを見ていく視点は、現代のクライン派に共有されていよう (Money-Kyrle,R.1969;Segal,H.1972;O'Shaughnessy,E.1981;Brenman,E.1985)。

このような病理的組織化の視点を手に入れることで、私たちは、どのような臨床的恩恵を蒙るのであろうか。筆者は、病理的組織化の観点は、現代の精神保健上の問題、たとえば心的外傷、いじめ、虐待などにおいても、威力を発揮することができる、と考える。すなわち、それらの問題においては、被害にあって側面が、自らの「弱さ」「駄目さ」を過酷に責めてしまうという臨床事態が現出する。常識的には、自己の尊厳を守るために加害者に対する怒りに向かってしかるべきだが、実際にはそうならないことも少なくない。それらをどう理解したらよいのかに関して、内的倒錯的对象関係や病理的組織化の視点は、巧みな説明概念と治療的手がかりを私たちに提供してくれるのである (祖父江、2001)。

もう一点、病理的組織化論は、上記の迫害不安や妄想性不安への防衛として働いているばかりではなくて、Steiner,J.によって、より病態の軽い症例でも抑うつ不安への防衛として、病理的組織化が活動することがはっきりしてきた。この視点から、臨床家が恩恵を受ける部分も大きい。なぜなら、抑うつ不安への防衛としての病理的組織化論は、いわゆる今日モーニング・ワークのワーク・スルーに難渋する、より軽症例においても、病理の本質を明るみにするからである。すなわち、それらの事例においては、対象喪失の悲しみを体験できずに、たとえば対象との一体化空想を執拗に持ち続けることも少なくない。Steinerは、「対象喪失の不安」と「対象喪失の経験」を区別し、前者においてはモーニング・ワークが通過できずに、対象との自己愛的な空想にしがみつきやすいことを論じた。今日、うつの状態や神経症の状態の患者の中には、対象喪失の課題を自己愛的な否認機制 (軽い病理的組織化) を駆使して、治療が難渋しているケースも少なくないのである。ちなみに筆者は、この問題に関しては、やや

違った角度から、早期エディプス・コンプレックス論の視点を入れて、以前に論じたことがある（祖父江、2003）。

以上、病理的組織化論の簡単な概説と、それが心理臨床にどのように応用できるかについて、2点取り上げ、私見を述べた。

b) 自閉症研究

これも平井（2004）、木部（2002, 2003）による詳しい解説があるので、ここではいくつかのポイントのみ取り上げ、その意義について検討したい。

まず、自閉症研究は、タヴィストック・クリニックの児童精神分析グループが成し遂げた臨床研究の大きな果実である。その研究の流れを遡れば、タヴィストック・クリニックでBick,E.が創始した乳幼児観察に辿り着く。彼は、生後数週間の乳幼児の観察から「早期対象関係における皮膚の体験」（1968）を著し、Klein,M.が定式化した妄想分裂ポジション以前の最早期の対象関係世界を描写した。彼が述べている要点としては、人格の諸部分は、原初的形態においては、お互いの結合力を持たず無統合であり、それをまとめる機能として、「皮膚の包み込む機能」が必要である、ということである。「皮膚機能」は、口に含まれた乳首、抱っこや話しかけ、なじみある母親の香りなどによって感じ取られ、乳児は体感的に自己のまとまりを経験していくのである。この正常な皮膚機能による包容が阻害されると、乳児は、「第二の皮膚」を形成してしまう。これは、正常な皮膚機能を代用するものであり、無統合への恐ろしい破局を防衛するものだが、対象との間には偽りの依存しか形成されない。

「第二の皮膚」の特徴としては、部分的あるいは全体的な「筋骨たくましいタイプの自己の包み込みの形成」や「ジャガイモ袋のような身体を硬くした姿勢」などの、筋肉の異常なたくましさに表れていたり、あるいは、言語的な能力の異様な昂進の形で発揮されたりする。

Meltzer,D.（1975）は、最初Bickの言う「第二の皮膚」現象が理解できなかったというが、彼と討論していく中で、心的次元論の観点をまじえ、Bickの考えをさらに展開させた。Meltzerは、自閉的な子どもは、ものを舐めたり、吸ったり、臭いを嗅いだりなどの、とても感覚的な行動が支配的で、経験が意

味あるものとして凝集していかない。そして、彼らの描画は、たとえば紙の両側に家を描き、ドアも重ねられ、内側と外側の区別がない。すなわち、空間概念のない、二次元的世界で生きている。したがって、彼らは家具や分析家にもたれかかるだけで、内部という感覚がない、と論じた。

Meltzer は、これらの現象から、自閉症児の世界は、対象との二次元的で表面的な関係性を生きており、その中に入り込んだり、取り入れたりする空間が存在しないので、投影同一化も取り入れ同一化も生じない、と結論付ける。その代わり、彼らは「模倣」と呼べるような一種の同一化を示すが、これによって彼らは、かろうじて対象との分離からくる破局を防衛していると論じ、この浅薄で、模倣的で、価値の外在化である防衛機制を「付着同一化」と概念化した。

こうして、Bick や Meltzer によって、自閉症児たちの対象世界を理解する重要なキー・コンセプトが獲得された。それによって、投影同一化という原始的防衛機制が使われる以前の、非象徴領域のマインドレスな世界への船出が可能になったのである。

その後、この領域での業績を積み上げた分析家のひとりとして、Tustin, F. を挙げるができる。Tustin の貢献に関して、木部 (2003) は、「自閉症を単に環境による成因とせず、母子の早すぎた心的な分離に伴う心的外傷として自閉症の病理を捉え、自閉症児の精神分析的アプローチに生涯を捧げた」と、要約している。すなわち、Tustin (1994) は、「心的外傷後ストレス症候群の乳児版の反応として自閉症を見なす」。だが、木部の解説にあるように、その外傷とは、乳児が授乳時に乳首を話す瞬間に、自らの口も一体化してなくなり、「ブラックホール」の奈落の底に落ち込んでしまうと感ぜられるほどの、恐ろしくも原初的な喪失体験なのである。

Tustin と並んで、自閉症研究に今日的な貢献をしたひとりとして、Alvarez, A. (1992) も挙げられよう。Alvarez から直接指導を受けた平井の解説 (2004) によると、彼女は Tustin 以上に、「自閉症児の欠損状態」に取り組んでいったとのことである。すなわち、Alvarez は、葛藤解決による発達の促進というよりは、対象との関わりへの希望を引き出すために、乳児の注意を喚起し、覚醒させ、元気づけるといふ、(彼女言うところの)「再生reclamation」といふ積極的

な技法の必要性を説いたという。いわば、自閉症＝欠損モデルの考えに近い立場と言える。

現在、自閉症研究では、Alvarez,A. や Reid,S. らが指導的立場を取るタヴィストック・クリニックの自閉症研究チームが組織され、臨床やワーク・ショップに果敢に取り組んでいる。彼らの総説（Alvarez,A. & Reid,S.1999）によると、自閉症の成因としては、欠損deficit、外傷に対する防衛defence、障害disorder、変奇 devianceの4通りほどが考えられる。そして、この病気の本質としては、認知の問題というよりは、間主観性intersubjectivityの障害であり、情緒性に基づく好奇心、願望、対人関係の正常な感覚の損傷だという。

さらに、彼らは、自閉症者には個々に違いがあることを強調し、3つの下位分類を挙げている。ひとつは、冷淡aloofだが、要求がましい「厚皮thick skinned」タイプ、もうひとつは、同じく冷淡だが、デリケートな「薄皮thin skinned」タイプ、最後にReidが提案する自閉的外傷後発達障害のタイプ。最後のタイプは、冷淡な薄皮タイプに似るが、受身的な人もいれば、積極的だが奇妙な人もいる。

治療としては、精神分析、乳児観察、乳児発達研究に基づく心理療法が、ほとんどの場合、週3回なされ、治療者は、精神分析的解釈者以上の存在であらねばならない。すなわち、人間の感情やコミュニケーションの世界に、患者を積極的に「再生reclaim」させねばならないし（Alvarez,A.）、自閉症固有の世界を超えたところには、事実興味深さがあることを、彼らに「例証demonstrate」しなければならない（Reid,S.）、としている。

このように見てくると、自閉症研究においては、Kleinや従来のクライン派が主なターゲットとしていた、投影同一化機制中心の精神病世界から、さらに早期の障害と推測される自閉症世界への研究へと向かい、そのいわゆるマインドレスな世界を理解するために、「第二の皮膚」、「付着同一化」、「ブラックホール」などの概念化が導かれ、さらには「再生」や「例証」のような、従来の精神分析技法を超えた技法的探究も並行して進められてきたと見ることができる。

残念ながら、筆者は、この自閉症領域に関しては十分な臨床経験を持ち合わ

せていないので、それを論考するに足る資格はない。ただ、Bickも言うように、成人の中でも第二の皮膚的な適応を見せる人たち、たとえば言語的筋肉質のタイプである、知的なおしゃべりで面接内における時空間を埋め尽くしてしまう人など、自閉症研究での知見が、成人の中のある種のパーソナリティ障害の理解と治療に生かされうる可能性を強く感じている。

この分野でのさらなる研究の発展が、他の臨床領域に十分に生かされる日も遠くはないだろう。

3) その他の動向

近年の対象関係論の動向としては、上記に述べてきた、投影同一化理論の発展上で成就した「欠損モデルと葛藤モデルの統合」、精神病のパーソナリティ病理研究の延長線上にある「病理的組織化研究」、精神病以前の極北の精神世界「自閉症研究」において、ほぼ包含されているだろう。

他には、独立学派のSymington, N.、Klauber, J.、Casement, P.らが、Bion, W.R.の強い影響の下、患者—治療者間において生起している交流を、細かくモニタリングしたり、「X現象」という呼称のもとに言い表そうとしたり、技法的な検索を試み続けている。

一方、クライン派では、特にJoseph, B.が「全体状況」という視点のもと、面接空間での特に非言語的な交流を、クライン派らしく「逆転移」を活用し、生き生きと繊細に理解していく技法を強調している。

ただし、Spillius, E.B. (1988, 1994)の言うように、今日ではクライン派と独立学派は、両派ともBionの影響が強いので、面接プロセスを細かく読み解いていく姿勢においては、かなり共通した面が多い。

転移—逆転移を中心視座にすえて、技法面での一層の洗練を目指しているのも、今日の対象関係論のひとつの動向といえるだろう。

他にも、Bollas, C.が「変形する対象」概念を提出したりなど、個々には見るべき研究もあるが、ひとつの動向を形成するまでには至っていないので割愛することにする。

4) 終わりに

「Ⅰなぜ対象関係論なのか」「Ⅱ イギリス対象関係論の歴史的展望」「Ⅲ 対象関係論の近年の動向」と3部に亘って、対象関係論の総説を試みてきた。もとより、これで対象関係論を万遍なく公平に検討できたであろうはずもないが、対象関係論の持つ臨床的意義を、Freudまで遡り、今日の動向にまで繋げて俯瞰できる、ひとつの視点を提供できたなら、この上なく幸いである。

注1) 岩崎(1977)やHinshelwood,R.D.(1991)は、「悲哀とメランコリー」より先の「ナルシズム入門」(1914)に、対象関係論の萌芽を見ている。なぜなら、この論文では、自己の一部や自己の考えすら、リビドーの対象になるという、対象への関心へと展開する視点が示されたからだという。

注2) ただし、Freud自身は、Ogden,T.H.(1986)の指摘するように、内的対象という用語を使うことはなかった。

注3) フェアバーン理論の全体を概観する解説としては、相田(1995)によるものが要を得ている。

注4) ただし、病理の基盤にスキゾイド状態を想定し、ヒステリーや強迫神経症などの神経症も、そのスプリッティングを扱うための移行技術 transitional technique とみなす視点は、疾病一元論であり、独創的である。

注5) もっとも同論文でGuntripは、Fairbairnが理論においては新しかったが、面接場面の技法においては、意外に「オーソドックスな解釈する人」であり、時には正確な解釈を押し付けてくる「古典的分析家」のようだった、と言及している。

注6) ただし、欲動の充足から対象希求性への、Fairbairnのパラダイム・シフトは、治療関係においても欲動から関係性へという視点の移動に影響を与えた。すなわち、Scharff,D.E. & Birtles,E.F.(1997)の論じるように、クライン派が逆転移や治療者側の主観的経験を、転移—逆転移の治療的関係性の文脈の中で重視する臨床理論を、その後押し出していく先鞭をつけた面もある、と言えるのである。したがって、Fairbairnの治療論を、提供モデルとのみ片付けたとしたら一面的になる。

注7) Kohon,G.(1986)によると、Klein,M.の対象関係論への大きな影響力は認めるものの、彼女自身を対象関係論の一部には含めないイギリスの分析家も少なくないという。

注8) Winnicottが人間発達を対象希求と快感希求の両面から考えたのは、WinnicottがFairbairnよりも、KleinやFreudに従順だったことに還元する人もいる(Gomez,L.1997)。

注9) 最近の乳幼児発達研究の知見から、Stern, D.N.(1985)は、乳児には生得的知識が備

わっており、自他の区別が生下時から可能というクライン派の考えを支持している。ただし、Stern は、Klein のいう最早期の防衛機制や妄想分裂ポジションなどの経験は、子どもが言語を使用できるようになって初めて可能になる、生後2年以降の体験であると、これに関しては否定的である。だが、Grotstein,J.S.(1994)は、この批判は、Stern が、自我心理学者のため空想 imagination と象徴 symbolization の区別ができないための誤解ではないかといっている。

- 注10) Winnicott と Bowlby の公私共に亘る親密な関係は、Bowlby の息子が編著者となっている最近の本 (Bowlby,R.2004) に書かれている。彼らはそもそも分析家の訓練をイギリス精神分析協会の初期に一緒に受けた仲で、その後も家族ぐるみの付き合いがあり、お互いの仕事のよき理解者だったという。Winnicott は Bowlby の愛着理論を、彼自身はその意義を十分に理解していたが、分析の同僚からは受け入れられないのではないかと、ことのほか憂慮していたらしい。実際に、Bowlby が愛着理論を1958年に、初めてイギリス精神分析協会で発表したときに、大いに攻撃を受けたとのことである。
- 注11) もっとも、彼らの環境要因への傾倒に個人的背景を見る向きもある。Winnicott は、父親が学習障害で、彼自身も読字困難を伴っていたと言うし (Jacobs,M.1995)、Bowlby は、彼自身が重要な愛着対象だった乳母と4歳時に別れており、その喪失体験が永続的な愛着関係の重要性を唱える背景にあるという説もある (Bowlby,R.2004)。だが、それを言うなら、Klein 自身も幼少期から数ある喪失体験にみまわれている (Segal,J.2004) ので、一概に個人的経験に還元するには注意が必要だろう。
- 注12) Klein 自身も環境を十分考慮に入れていたという指摘は、時に散見される。その中でも、最近発表された Aguayo,J. (2002) の論考が興味深い。彼は、Klein が自分の初孫を観察した未発表論文を詳細に検討し、彼女がいかに孫の環境要因に注意を払い、孫とその母親との関係性に気を配っていたかを、強調している。
- 注13) ただし、Balint 自身は、治療的枠組みがなくなることへの危険性に自覚的であり、リミット・セッティングを重視した。それがないと、患者は「悪性の退行」に陥ってしまい、早期の外傷を「良性の退行」のもとで、癒せなくなると考えていた。
- 注14) Godley,W. (2001) によると、Khan がホモのフェラチオ・ジョークを電話で交わしていた相手とは、Winnicott らしい。そのみならず、Khan は、面接中しょっちゅう電話に出たとのことだし、さらには Godley の妻を誘惑したり、酔っ払って分析に臨んだり、挙句の果てには Khan 自身の妻と大喧嘩し始めたり、読む側の胸を悪くするほどの濫行振りである。
- 注15) もっとも、Khan のこの暴挙は、ひとえに彼のパーソナリティ病理に帰せられるところだろう。独立学派全般に及ぶところは少ない。独立学派の名誉のため言えば、Rayner, E. (1991) の強調するところだが、独立学派の第一義的貢献は Winnicott に代表されるように、移行性 Transitionality、創造性 Creativity、象徴化 Symbolization の

過程が、分析プロセスの中で、創造的に生成される側面を発見したところにあり、単なる環境論に終わっていないところである。

注16) ただし、このレポートには、Gonzalez の寄稿は間に合わなかったとのことで掲載されていないので、彼のディスカッションの詳細は不明である。

注17) このパネル・ディスカッションで、それでもなお Loewenstein は、クライン派の概念は、未形成の心的単位（筆者注：原始的防衛機制のことを指すと思われる）を信じている点で、小人の古い胎生学と大いに共通する生物学的視点だと見当違いの批判を加えている。Segal はそれに応え、クライン派の理論は、心的発達を分化と成熟の観点で理解し、対象関係の移り変わりをとりわけ強調する思考様式なのだ、と、反論を加えている。

注18) ちなみに、クライン派の Malcolm,R.R. (1987) は、Freud,S. に似た、死の本能に関する簡潔な説明を加えている。すなわち、生の本能は、統合に向かう傾向として表れ、死の本能は、解体に向かう傾向として出現すると。そして、乳児は、その葛藤を不安として体験するのだ、と。

注19) 同じくクライン派の Feldman,M. (2000) も、現代的な死の本能概念を提示している。彼が言うには、死の本能の満足は、知覚し経験する自己の破滅や文字どおりの死や破滅にあるのではなくて、知覚能力や判断能力を攻撃し歪めることにある、と臨床的には見出せるという。すなわち、この観点も、死の本能の表れは、心の健全な痛みを避けるために、健康な自己の知覚を歪めることに目的があるという、病理的組織化論に繋がるような認識の転換となっている。

注20) ただし、Winnicott は Balint の「一次的調和」概念を、それが「一次的」と呼ぶにはあまりに複雑だとして、ひどく嫌ったという (Rodman,F.1987)

注21) Heimann は、投影同一化概念にほとんど言及していない。彼女は、投影概念で充分だと考えていた節がある。

注22) ただし、Heimann のこの考え方は、逆転移の臨床的乱用だとして、Klein に批判を浴び、これをもとに Heimann は Klein と袂を分かった。もっとも、Heimann 自身も1960年の「逆転移」論文の中では、分析家自身の病理からくる逆転移も多いとして、治療的道具としての逆転移の乱発に対して警告を発している。Segal,H. (1977) の謂いに従えば、「逆転移はもっともよい召使であり、最悪の主人でもある」。

注23) ちなみに Steiner,J. は、“Psychic Retreats”において、病理的組織化に関する自らの考えを体系化させ、一応の完成をみた後、病理的組織化における技法論に、より関心を深めてきているようである (Steiner,J.2000)。すなわち、病理的組織化に知らず知らずのうちに荷担してしまう分析家側の逆転移や、その役割に気づくことによって、さらに患者の病理理解や治療的展開をもたらすことができる技法面に関して、である。

参考文献

- Aguayo, J. (2002): 'Reassessing the clinical affinity between Melanie Klein and D.W. Winnicott (1935-51): Klein's unpublished "notes on baby" in historical context' *The International Journal of Psychoanalysis* 83, 1133-1152
- 相田信男 (1995): 「フェアベーンの考え方とその影響」、小此木啓吾他編 (1995): 『現代のエスプリ別冊 精神分析の現在』至文堂
- Alvarez, A. (1992): *Live Company: Psychoanalytic Psychotherapy with Autistic, Borderline, Deprived and Abused Children*. Routledge. 千原雅代、中川純子、平井正三訳 (2002): 『心の再生を求めて』岩崎学術出版社
- Alvarez, A. & Reid, S. (1999): 'Introduction: autism, personality and the family' In: Alvarez, A. & Reid, S. (ed.) (1999): *Autism and Personality: findings from the Tavistock Autism Workshop*. Routledge
- Balint, M. (1952): *Primary Love and Psychoanalytic Technique*. Hogarth Press, 中井久夫他訳 (1999): 『一次愛と精神分析技法』みすず書房
- Balint, M. (1957): 'Criticism of Fairbairn's generalisation about object-relations' In: Scharff, D.E. & Birtles, E.F. (ed.) (1994): *From Instinct to Self: Selected Papers of W.R.D. Fairbairn vol. I: Clinical and Theoretical Papers*. Jason Aronson
- Balint, M. (1968): *The Basic Fault: Therapeutic aspects of regression*. Tavistock Publications, 中井久夫訳 (1978): 『治療論からみた退行』金剛出版
- Bick, E. (1968): 'The experience of the skin in early object-relations' *The International Journal of Psychoanalysis* 49, 484-486, 松木邦裕監訳 (1993): 「早期対象関係における皮膚の体験」『メラニー・クライン トゥデイ②』岩崎学術出版社
- Bion, W.R. (1957): 'On arrogance' In: Bion, W.R. (1967): *Second Thoughts*. Jason Aronson
- Bion, W.R. (1959): *Attacks on Linking*. In *Second Thoughts*. Jason Aronson, 松木邦裕監訳 (1993): 「連結することへの攻撃」『メラニー・クライン トゥデイ①』岩崎学術出版社
- Bion, W.R. (1962a): *A Theory of Thinking*. In *Second Thoughts*. Jason Aronson, 松木邦裕監訳 (1993): 「思索についての理論」『メラニー・クライン トゥデイ②』岩崎学術出版社
- Bion, W.R. (1962b): *Learning from Experience*. Reprinted (1984), Karnac Books
- Biran, H. (2003): "Attacks on linking" and "alpha function" as two opposite elements in the dynamics of organization' In: Lipgar, R.M. and Pines, M. (ed.) (2003) *Building on Bion: Branches*. Jessica Kingsley Publishers
- Bléandonu, G. (1994): *Wilfred Bion: His Life and Works 1897-1979*. Free Association Books
- Bowlby, R. (ed.) (2004): *Fifty years of Attachment Theory*. Karnac Books
- Brenman, E. (1985): 'Cruelty and narrow mindedness' *The International Journal of PsychoAnalysis* 66, 273-281.

- Fairbairn, W.R.D. (1940) : 'Schizoid factors in the personality' In : Fairbairn, W.R.D. (1952) : Psychoanalytic Studies of the Personality. Tavistock Publications、山口康司訳 (1986) : 『人格の対象関係論』文化書房博文社
- Fairbairn, W.R.D. (1943) : 'The repression and return of bad objects (with special reference to the "war neuroses"' In : ibid.
- Fairbairn, W.R.D. (1944) : 'Endopsychic structure considered in terms of object-relationships' In: ibid.
- Fairbairn, W.R.D. (1946) : 'Object-relationships and dynamic structure' In: ibid.
- Fairbairn, W.R.D. (1955) : 'Observations in defence of the object-relations theory of the personality' In: Scharff, D.E. & Birtles, E.F. (ed.) (1994) : From Instinct to Self : Selected Papers of W.R.D. Fairbairn vol. I : Clinical and Theoretical Papers. Jason Aronson
- Fairbairn, W.R.D. (1958) : 'On the nature and aims of psychoanalytical treatment' In : ibid.
- Feldman, M. (2000) : 'Some views on the manifestation of the death instinct in clinical work' The International Journal of Psychoanalysis 81, 53-65
- Freud, S. (1914) : 'On narcissism: An introduction' In : Standard Edition, vol. 14, Hogarth Press, 懸田克み他訳 : 「ナルシシズム入門」『フロイト著作集5』人文書院
- Freud, S. (1917) : 'Mourning and melancholia' In: Standard Edition, vol. 14, Hogarth Press, 井村恒郎他訳「悲哀とメランコリー」『フロイト著作集6』人文書院
- Freud, S. (1923) : 'The ego and the id' In : Standard Edition, vol. 19, Hogarth Press, 井村恒郎他訳 : 「自我とエス」『フロイト著作集6』人文書院
- Godley, W. (2001) : 'Saving Masud Khan' London Review of Books 22 February, 3-7
- Gomez, L. (1997) : An Introduction to Object Relations. Free Association Books
- Grinberg, L. (1962) : 'On a specific aspect of countertransference due to the patient's projective identification' The International Journal of Psychoanalysis 43, 436-440
- Grinberg, L. (1990) : The Goals of Psychoanalysis : Identification, Identity, and Supervision. Karnac Books
- Grosskurth, P. (1986) : Melanie Klein: Her world and her work. Jason Aronson
- Grotstein, J.S. (1994) : 'Notes on Fairbairn's metapsychology' In : Grotstein, J.S. & Rinsley, D.B. (ed.) (1994) : Fairbairn and the Origins of Object Relations. Free Association Books
- Grotstein, J.S. & Rinsley, D.B. (1994) : 'Editors' introduction' In : Grotstein, J.S. & Rinsley, D.B. (ed.) (1994) : Fairbairn and the Origins of Object Relations. Free Association Books
- Guntrip, H. (1971) : Psychoanalytic Theory, Therapy, and the Self. Basic Books, 小此木啓吾・柏瀬宏隆訳 (1981) : 『対象関係論の展開』誠信書房
- Guntrip, H. (1975) : 'My experience of analysis with Fairbairn and Winnicott (How complete a result does psycho-analytic therapy achieve' International Review of Psychoanalysis

2, 145-156

- Heimann, P. (1950) : 'On counter-transference' In : Heimann, P. (1989) : *About Children and Children-No-Longer*. Routledge
- Heimann, P. (1960) : 'Counter-transference' In : *ibid.*
- Heisenberg, W. (1956) : 尾崎辰之助訳 (1965) : 『現代物理学の自然像』みすず書房
- Hinshelwood, R.D. (1991) : *A Dictionary of Kleinian Thought*, second ed. Free Association Books
- 平井正三 (2004) : 「自閉症への精神分析的アプローチの現在——アルヴァレスまで」、松木邦裕編 (2004) : 『現代のエスプリ別冊 特集オールアバウト「メラニー・クライン」』至文堂
- Hopkins, L. (1998) : 'D.W.Winnicott's analysis of Masud Khan : a preliminary study of failures of object usage' *Contemporary Psychoanalysis* 34, 5-47
- Hopkins, L. (2000) : 'Masud Khan's application of Winnicott's "play" techniques to analytic consultation and treatment of adults' *Contemporary Psychoanalysis* 36, 639-663
- Isaacs, S. (1948) : 'The nature and function of phantasy' *The International Journal of Psychoanalysis* 29, 73-97、松木邦裕編・監訳 (2003) : 「空想の性質と機能」『対象関係論の基礎』新曜社
- 岩崎徹也 (1977) : 「メラニー・クライン入門 解題」、H. スイーガル著、岩崎徹也訳 (1977) : 『メラニー・クライン入門』岩崎学術出版社
- Jacobs, M. (1995) : *D.W.Winnicott*. Sage Publications
- Joseph, B. (1987) : 'Projective identification : some clinical aspects' In : Joseph, B. (1989) : *Psychic Equilibrium and Psychic Change*. Routledge
- Khan, M.M.R. (1974) : *The Privacy of the Self*. Karnac Books
- Kavaler-Adler, S. (2003) : *Mourning, Spirituality and Psychic Change*. Brunner-Routledge
- 河合隼雄 (1986) : 『心理療法論考』新曜社
- 木部則雄 (2002) : 「自閉症の対象関係——自閉症の精神分析的理解——」*乳幼児医学・心理学研究*11(1)、1-13
- 木部則雄 (2003) : 『「タスティン入門」解題』、S. スペンスリー著、井原成男他訳 : 『タスティン入門』岩崎学術出版社
- King, P. & Steiner, R. (ed.) (1991) : *The Freud-Klein Controversies 1941-45*. Routledge
- 衣笠隆幸 (1992) : 『「共感」——理解の基礎となるものと理解を妨げるもの』*精神分析研究*35 巻第5号、479-489
- 衣笠隆幸 (1997) : 「訳者解題」、シュタイナー、J. 著、衣笠隆幸監訳 (1997) 『こころの退避』岩崎学術出版社
- 北山修 (2001) : 『精神分析理論と臨床』誠信書房

- Klein, M. (1927): 'Symposium on child-analysis' In : Klein, M. (1975): The Writtings of Melanie Klein volume1. The Hogarth Press, 小此木啓吾他監修 (1983) : 「児童分析に関するシンポジウム」『メラニー・クライン著作集1』誠信書房
- Klein, M. (1935): 'A contribution to the psychogenesis of manic-depressive states' In: Klein, M. (1975) : The Writtings of Melanie Klein volume1. The Hogarth Press, 小此木啓吾他監修 (1983) : 「躁うつ状態の心因論に関する寄与」『メラニー・クライン著作集3』誠信書房
- Klein, M. (1940): 'Mourning and its relation to manic-depressive states' In : Klein, M. (1975) : The Writtings of Melanie Klein volume1. The Hogarth Press, 小此木啓吾他監修 (1983) : 「喪とその躁うつ状態との関係」『メラニー・クライン著作集3』誠信書房
- Klein, M. (1946) : 'Notes on some schizoid mechanisms' In : Klein, M. (1975) : The Writtings of Melanie Klein volume3. The Hogarth Press, 小此木啓吾他監修 (1985) : 「分裂的機制についての覚書」『メラニー・クライン著作集4』誠信書房
- Kohon, G. (1986) : 'Notes on the history of the psychoanalytic movement in Great Britain' In: Kohon, G. (ed.) (1986) : The British School of Psychoanalysis : The Independent Tradition. Free Association Books, 西園昌久監訳 (1992) : 「英国における精神分析の歴史に関する覚え書」『英国独立学派の精神分析』岩崎学術出版社
- Laing, R.D. (1965) : The Divided Self : An Existential Study in Sanity and Madness. Penguin, 阪本健二他訳 (1971) 『ひき裂かれた自己』みすず書房
- Little, M.I. (1990) : Psychotic Anxieties and Containment : A personal record of an analysis with Winnicott. Jason Aronson, 神田橋條治訳 (1992) : 『精神病水準の不安と庇護 ウィニコットとの精神分析の記録』岩崎学術出版社
- López-Corvo, R.E. (2003) : The Dictionary of the Work of W.R.Bion. Karnac Books
- Lussier, A. (reporter) (1972) : 'Panel on "aggression"' The International Journal of Psychoanalysis 53, 13-19
- Malcolm, R.R. (1987) : 'Melanie Klein : Achievements and problems (Reflections on Klein's conception of Object Relationship)' In : Langs, R. (ed.) (1987) : The Yearbook of Psychoanalysis and Psychotherapy, vol. 2, Gardner Press
- 松木邦裕 (1990) : 「クライン派精神分析における人格病理、とりわけ、人格のなかの心的構造体についての研究の展開」精神分析研究34巻第2号、81-91
- 松木邦裕 (1996) : 『対象関係論を学ぶ』岩崎学術出版社
- 松木邦裕 (2002) : 「対象関係論」、小此木啓吾編集代表 (2002) : 『精神分析事典』岩崎学術出版社
- 松木邦裕 (2004) : 「クライン分析の今日」、松木邦裕編 (2004) 『現代のエスプリ別冊 特集 オールアバウト「メラニー・クライン」』至文堂
- Meltzer, D. (1968) : 'Terror, persecution, dread - a dissection of paranoid anxieties' The

- International Journal of Psychoanalysis 49, 396-400, 松木邦裕監訳 (1993) : 「恐怖、迫害、恐れ—妄想性不安の解析」『メラニー・クライン トゥデイ』岩崎学術出版社
- Meltzer, D. (1975) : 'Adhesive identification' In : Meltzer, D. (1994) : Sincerity and Other Works. Karnac Books
- Meltzer, D. (1982) : 'The conceptual distinction between projective identification (Klein) and container-contained (Bion)' The Journal of Child Psychotherapy 8, 185-202
- Mitchell, J. (1986) : 'Editor' s introduction' In : Mitchell, J.(ed.) (1986) : The Selected Melanie Klein. The Free Press
- Mitchell, S.A. (1981) : 'The origin and nature of the "Object" in the theories of Klein and Fairbairn' Contemporary Psychoanalysis 17(3),374-398
- Money-Kyrle,R. (1956) : 'Normal counter-transference and some of its deviations' The International Journal of Psychoanalysis 37, 360-366
- Money-Kyrle,R. (1969) : 'On the fear of insanity' In:The Collected Papers of Roger Money-Kyrle. Clunie Press
- 成田善弘 (2004) : 「精神分析総論——歴史と展望——」、氏原寛他共編 (2004) : 『心理臨床大事典 改訂版』培風館
- Ogden, T.H. (1986) : The Matrix of the Mind. Jason Aronson, 藤山直樹訳 (1996) : 『こころのマトリックス』岩崎学術出版社
- Ogden, T.H. (2002) : 'A new reading of the origins of object-relations theory' The International Journal of Psychoanalysis 83, 767-782
- 小此木啓吾 (1985) : 『現代精神分析の基礎理論』弘文堂
- O'Shaughnessy, E. (1981) : 'A clinical study of a defensive organization' The International Journal of Psycho-Analysis 62, 359-369.
- Rayner, E. (1991) : The Independent Mind In British Psychoanalysis. Jason Aronson
- Riviere, J. (1936) : 'A contribution to the analysis of the negative therapeutic reaction' The International Journal of Psychoanalysis 17, 304-320, 松木邦裕監訳 (2003) : 「陰性治療反応の分析への寄与」『対象関係論の基礎』新曜社
- Rogers, C.R. (1942) : Counseling and Psychotherapy. Houghton Mifflin
- Rodman, F.(ed.) (1987) : The Spontaneous Gesture : Selected Letters of D.W.Winnicott. Harvard University Press
- Rosenfeld, H.(1971): 'Contribution to the psychopathology of psychotic states:the importance of projective identification in the ego structure and the object relation of the psychotic patient' In : Spillius, E.B. (ed.) (1988) : Melanie Klein Today, vol. 1. Routledge, 松木邦裕監訳 (1993) : 「精神病状態の精神病理への寄与」『メラニー・クライン トゥデイ①』岩崎学術出版社

- Rosenfeld, H. (1978) : 'Notes on the psychopathology and psychoanalytic treatment of some borderline patients' *The International Journal of Psycho-Analysis* 59, 215-221.
- Rosenfeld, H. (1983) : 'Primitive object relations and mechanisms' *The International Journal of Psycho-Analysis* 64, 261-267.
- Scharff, D.E. & Birtles, E.F. (ed.) (1994) : *From Instinct to Self : Selected Papers of W.R.D. Fairbairn vol. I : Clinical and Theoretical Papers*. Jason Aronson
- Scharff, D.E. & Birtles, E.F. (1997) : 'From instinct to self : the evolution and implications of W.R.D. Fairbairn's theory of object-relations' *The International Journal of Psychoanalysis* 78, 1085-1103
- Segal, H. (1964) : 'Phantasy and other mental processes' *The International Journal of Psychoanalysis* 45, 191-194, 松木邦裕訳 (1988) : 「空想とその他の心的過程」『クライン派の臨床』岩崎学術出版社
- Segal, H. (1972) : 'A delusional system as a defence against the re-emergence of a catastrophic situation' *The International Journal of Psycho-Analysis* 53, 393-401.
- Segal, H. (1977) : 'Countertransference' *The International Journal of Psychoanalytic Psychotherapy* 6, 31-37, 松木邦裕訳 (1988) : 「逆転移」『クライン派の臨床』岩崎学術出版社
- Segal, H. (1993) : 'On the clinical usefulness of the concept of death instinct' *The International Journal of Psychoanalysis* 74, 55-61
- Segal, J. (2004) : *Melanie Klein, second ed.* Sage Publications, 祖父江典人訳 (2005出版予定) : 『メラニー・クライン——その生涯と理論・臨床』誠信書房
- 祖父江典人 (1994) : 「陽性転移について」*精神分析研究* 38巻第1号、22-32
- 祖父江典人 (2001) : 「心的外傷の背後に潜む倒錯的内的対象関係」*精神分析研究* 45巻第4号、371-379
- 祖父江典人 (2003) : 「成人における早期エディプス・コンプレックスとその運命——『知ること』と『答えのない答え』——」*精神分析研究* 47巻第4号、486-494
- 祖父江典人 (2004a) : 「Wilfred R. Bion 研究 (Ⅲ) ——『体制乳房』との創造的インターコースから『不在の乳房』の結晶化——」*愛知県立大学社会福祉研究* 第6巻、15-28
- 祖父江典人 (2004b) : 「共感の2種——『融合としての共感』と『分離としての共感』——」*心理臨床学研究* 第22巻第1号、1-11
- Spillius, E.B. (1988) : 'Part one introduction' Spillius, E.B. (ed.) (1988) : *Melanie Klein Today, vol. 2*, Routledge, 松木邦裕監訳 (2000) : 「総説」『メラニー・クライントゥデイ#』岩崎学術出版社
- Spillius, E. (1994) : 'Developments in Kleinian thought : overview and personal view' *Psychoanalytic Inquiry* 14, 324-364

- Steiner, J. (1993) : *Psychic Retreats : Pathological organizations in psychotic, neurotic and borderline patients*. 衣笠隆幸監訳 (1997) : 『こころの退避』 岩崎学術出版社
- Steiner, J. (2000) : 'Containment, enactment and communication' *The International Journal of Psychoanalysis* 81, 245-255
- Stern, D.N. (1985) : *The Interpersonal World of the Infant : A view from psychoanalysis and developmental psychology*. Basic Books. 小此木啓吾・丸田俊彦監訳 (1989、1991) : 『乳児の対人世界 理論編』『乳児の対人世界 臨床編』 岩崎学術出版社
- 鈴木智美 (2004) : 「クライン派におけるパーソナリティ論の展開——スタイナー」、松木邦裕編 (2004) : 『現代のエスプリ別冊 特集オールアバウト「メラニー・クライン」』 至文堂
- 鎌幹八郎、名島潤慈 (1991) : 「事例研究法論」、河合隼雄、福島章、村瀬孝雄編 (1991) : 『臨床心理学の科学的基礎』 金子書房
- Tustin, F. (1994) : 'The perpetuation of an error' *The Journal of Child Psychotherapy*, 20, 3-23、木部則雄訳 (1996) : 「誤謬の永続化」『Imago vol7-11 特集自閉症』 青土社
- Winnicott, D.W. (1949) : 'Mind and its relation to the psyche-soma' In : Winnicott, D.W. (1958) : *Through Paediatrics to Psychoanalysis*. Tavistock Publications, 北山修監訳 (1990) : 『児童分析から精神分析へ ウィニコット臨床論文集Ⅱ』 岩崎学術出版社
- Winnicott, D.W. (1950~55) : 'Aggression in relation to emotional development' In : *ibid.*
- Winnicott, D.W. (1952) : 'Psychoses and child care' In : *ibid.*
- Winnicott, D.W. (1960) : 'Ego distortion in terms of true and false self' In : Winnicott, D.W. (1965) : *The Maturation Process and the Facilitating Environment*. Hogarth Press, 牛島定信訳 (1977) : 『情緒発達の精神分析理論』 岩崎学術出版社
- Winnicott, D.W. (1962) : 'A personal view of the Kleinian contribution' In : *ibid.*
- Winnicott, D.W. & Khan, M.M.R. (1953) : 'Review of psychoanalytic studies of the personality by W.R.D. Fairbairn' *The International Journal of Psychoanalysis* 34, 329-333
- 矢崎直人 (2002) : 「独立学派」、小此木啓吾編集代表 (2002) : 『精神分析事典』 岩崎学術出版社